



JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷 2-35-10

本郷瀬川ビル 113

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI NEWS

029 APRIL 20.
1996

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

● 特集／阪神大震災1年後・被災地の春	
1. 震災被災地に再び春がきたが	1
2. 復興まち・すまいづくりの実践報告	3
3. マンション自力再建体験記	4
4. <レティファガツク> ってこんな住宅、住まい方	5
5. ランドスケープ復興支援会議発足	7
● 連載／アメリカのランドスケープ事情(その5)	8
● 委員会報告	
事業委員会	17
選挙管理委員会	18
国際委員会	19
● ブロック例会レポート	19
北海道ブロック	19
関東ブロック	19
中部ブロック	20
● 事務局より	20
● 編集後記	20

特集 被災地の春 1

震災被災地に再び 春がきたが

阪神大震災復興市民まちづ
くり支援ネットワーク

小林 郁雄

KOBAYASHI, Ikuo

(まちづくり株式会社コー・プラン)

特集 阪神大震災1年後・被災地の春

阪神・淡路大震災被災地に再び春が巡ってきた。満開のコブシやモクレンの白い花が、豊かに淋しい。桜はつらい。

去年の3月は、震災復興都市計画事業の計画決定の激動の収まらない騒然とした中で、避難所には「難民」があふれていた。避難民ではない。帰るべき故郷のない人々を難民という。木賃長屋など住まいの倒壊焼失し、帰るべき家のない人々の群れを難民と言わずして、なんと言うのか。1年余を経て、30万人を越す避難者の1/3は自宅に戻り、1/3は新たな貸家・同居に移り、最後の1/3が仮設住宅・仮住宅に残る、本当の難民となっている。

ライフライン・道路鉄道港湾などの復旧のスピードには目を見張るものがある。さすが先進国日本(もちろん皮肉です)。それらに合わせるかのように、大震災への関心の風化、中央との温度差。再び巡る被災地の春に、「すまい」を前提とした「くらし」の復興は遅々として先がみえていない。復興まちづくりの息吹は確かではないが、それでも着実に一歩ずつ進められているいくつかの取り組みを<特集>として、紹介する。

鷹取地区(区画整理区域)での
ひまわりの種蒔き風景('96.4/7)



◆「すまい」の修復・再建・復興プログラム

街や住宅の壊滅に対し、そのハードの修復・再建・復興がまず必要である。福祉や文化、伝統や景観、情緒や人情などソフトな仕組みへの配慮なしに、「くらし」や「すまい」は成り立たないが、先立つものは家である。同じような観点からすれば、制度・事業や体制・組織もさることながら、先立つものは金である、なんとも味気無いことだが、

そうした味もそっけもない現実の中で進められている「すまい-まちづくり」再生プログラムのうち、主要な取り組みは次の3つである。

- 復興市民まちづくり
- 共同すまいづくり(共同建替)
- マンション再建

●復興市民まちづくり については、いろいろなメディアで論じられており、私もすでに各誌に書いた(「復興まちづくりは、今」建築とまちづくり96年1月号、「神戸からの手紙、再び」地域開発96年2月号など)。問題は白地区域と呼ばれている面的整備事業制度の用意されていないところのまちづくりである。もちろん、震災復興都市計画事業地区(区画整理、再開発)における悪戦苦闘、重点復興地域における展望のないまちづくり活動など、白地でない地区・地域でも気の遠くなるようなことばかりだが。

●共同すまいづくり(共同建替) については、重点復興地域のまちづくりとあわせて、灘区新在家南地区における実践報告を後藤祐介さんにしてもらった。共同建替え事業が密集零細住宅再建の唯一の方策である。にもかかわらず、補助制度や組織支援の面で通常の枠以上の特別な優遇はされているものの、枠をこえることはできない。すまいの再建の切り札なのだから、早急に震災特別共同化事業(例えば、現在の事業枠を越え権利調整に踏み込むことのできるような事業)の導入が必

要である。それによってまた、地域のまちづくりと一体となった共同再建に、正規部隊である再開発コーディネーター協会などが本格参入することにもつながる。

●マンション再建 については、神戸では高田昇さんを中心にした共同再建支援チームや兵庫県住宅供給公社などで、精力的に取り組んできている。こうべまちづくりセンターの「すまい・まちづくり人材センター」専門家派遣の1995年度実績(9507~9603)101件のうち、24件が分譲マンション建替計画に関するものであった。総合設計制度の大幅な緩和適用によって、マンション建替の建築ハード面の課題、特に容積率既存不適格に関しては、かなり条件整備された。ただし、住宅環境や街なみ景観にとってそれらのツケがいつか回ってくることになるが。それでも神戸市で100件を越すといわれる要再建マンションのうち、20数件の事業化検討が進められているに止まるという。その隘路は何か。グリーンハイツ住吉というマンションの自力再建支援に取り組む野崎隆一さんの体験記を寄せていただいた。事業手法、自己資金、再建組合の法人格、借入金担保の解消など次々と続く解決すべき問題の一端を読み取っていただきたい。全国に無数にある分譲マンションの20年以内の近未来の話でもあり、区分所有法検討を真剣に始めなければならない。

◆調査・応援・プロジェクトネットワーク

被災地の春に、3つの新たなネットワークがスタートした。それらはこの1年間進めてきた復興市民まちづくり支援ネットワークの重要なサブ・プログラムの発展的かつ拡散的な展開といえるだろう。少なくとも私たち支援ネットワークにとっては、新たな仲間との新たな地平の開拓にあたる。

市民まちづくりは、ハードな街の基盤(道路・公園)や住宅・建築だけではどうにもならない。被災地の調査から人々の活動支援、そのための場所(復興まちづくりハウスなど)の確保、ニュースの発行、記録の作成など多岐にわたるソフトな支援も欠かせない。もちろん各種イベントやさまざまな個別プロジェクト支援も重要だ。福祉ケアや緑花再生などに至るまで。

●震災復興・実態調査ネットワーク(被災地定点調査交流会)が4月4日から始まった。昨年2月~3月に全国のボランティアの協力も含め、関西の大学生など(特に、東は大阪芸術大学、西は神戸芸術工科大学の両芸術系学生の黙々とした献身的努力を建築系・計画系の関係者は深く記憶に刻み込んでおかねばならない)延べ1000人によって阪神・淡路大震災被害実態緊急調査(被災度別建物分布状況図/震災復興都市づくり特別委員会)が調査作成された。その結果は、阪神・淡路の市街地被災状況を一様に概観できる唯一の原典資料となった。それだけでなく、参加した多くの学生・関係者が、その後自らが調査した地区の復興へ、

何らかの関与を続けていく元となったといえる(例えば、西宮-復興まちづくり支援ネットワーク、芦屋-大阪大学+ASIYA倶楽部など)。また、各地でそれぞれの自主的な関与により、被災地の定点観測調査が続けられている。動機はさまざまであり、それにあわせて調査内容もさまざまである。しかし、いずれも3カ月ごと程度に愛情をもって各フィールドを巡り歩いている。そうした、震災復興に向けた実態調査のデータと関係者の交流を図ることを目的としたネットワークである。しかし、いまだ被災棟数・戸数は正確には判らないし、今後もしっかりさせることは不可能である。また、現在の復旧復興状況(建物だけでなく、従前居住・営業者など人的側面も含め)の統括的状況把握もされていない。簡単な話、自宅でも仮設住宅でもないところに避難している人々は、その総数すら不明である。もちろん、その属性や避難場所など皆目わかっていない。そうした、本当の被害状況や回復の程度を数量的に把握せずにどんな復興計画があり得ようか。地元自治体・研究者などに資金・人材の余力はない。国・近畿圏などによる広域調査体制が切望される。

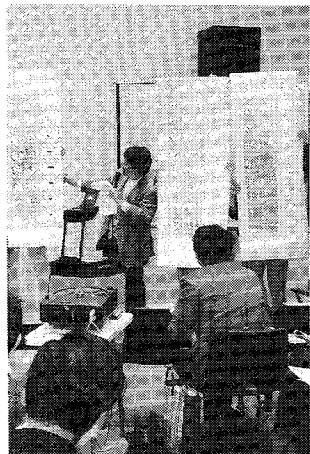
●長田・協同居住支援団(NAGATAコレクティブケアネットワーク)は、コレクティブ・ハウジング事業推進応援団の早急な結末にあわせて、これから正式に発足が予定されているネットワークである。コレクティブ・ハウジングが特に被災地高齢者の新たな住宅としてモデル建設される動きが急である。それらのソフトな仕組みを十分用意することなしに、入れ物となる協同居住型住宅が建設されれば、どうなるか。せめて長田区におけるコレクティブ・ハウジングのケアを考え、支援する取り組みをスタートさせる。福祉ケースワーカー、看護婦、医師、ボランティア・コーディネーターなどの人達と、住宅・建築・まちづくりプランナーなどの総合的な協同居住支援団である。

こうしたネットワークの元になったコレクティブ・ハウジング事業推進応援団の団長石東直子さんに「コレクティブ・ハウジングとはどんなものか、どんな住まい方なのか」をまとめてもらった。

●ランドスケープ復興支援会議(阪神グリーンネット)は2月6日に発足した。私たちまちづくり支援ネットワークは、阪神市街地緑花再生プロジェクトとして第1段階:ガレキに花を(ガレキの花畑化)を昨年4月以来進めてきた。今年の春いよいよ家々の再建が始まり、第2段階:家々に苗木を(敷地に記念樹を)を始める時期に来ていた。こうした動きにタイアップして、ランドスケープや造園の専門家が声を挙げ被災地のランドスケープ復興支援に乗り出すことになった。そのへんの経過を中瀬勲さんに宣言してもらった。

むろん、安藤忠雄さんが提唱し、兵庫県と21世紀ひょうご創造協会などが進めている「ひょうごグリーンネット」とも協力しあって、被災地の豊かな緑を願うネットワークをめざす。

神戸芸術工科大学・齋木研究室の調査発表('96.4/4 こうべまちづくり会館)



特集 被災地の春2

復興まち・すまい づくりの実践報告

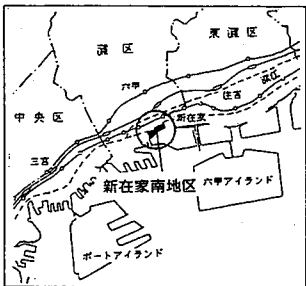
—神戸市・新在家南地区—

神戸市東部市街地復興市民
まちづくり支援ネットワーク

後藤 祐介

GOTO, Yusuke

(ジュー計画研究所)



〇復興まちづくり

<まちづくり協定の締結>

当地区は、旧西国浜街道沿いに位置する灘五郷の一つの「西郷酒造地区」で、全域が準工業地域である。そのため、震災以前から用途混在の回避や酒蔵のまちとしてのまち並み誘導を図ること等のために「まちづくり協定」を検討していた。

今回の震災では、地区内の家屋の約8割が倒壊した。その復興にあたっては「まちづくり協定」が有効と考え、復興まちづくり構想を検討する一方で、まちづくり協定運営委員会を設置し、協定運営細則を煮詰め、神戸市当局と下記のような内容のまちづくり協定を今年度中（3月まで）に締結する運びとなった。

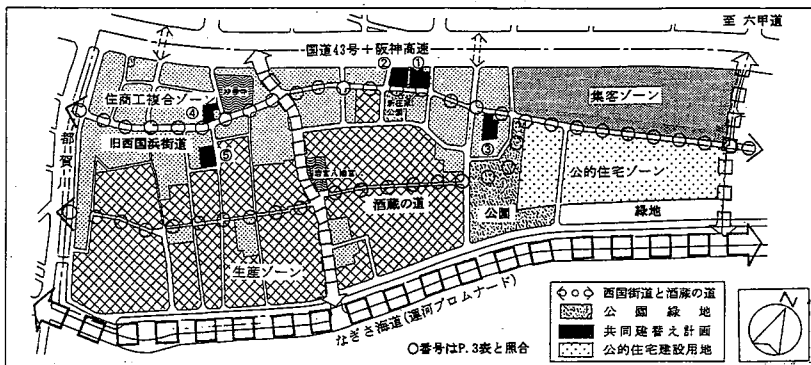
—新在家南地区のまちづくり協定項目—

- ①建築物の用途の制限（風俗営業等）
- ②荷さばき等の駐車に供される用地の設置
- ③ファミリー形式の住居の推奨（ワンルームマンションの制限）
- ④建築物等の意匠のまち並みへの配慮
- ⑤周辺環境への配慮

<酒蔵の道の再生計画の推進>

灘五郷のまちとして、震災以前にも整備されつつあった「酒蔵の道」は、今回の震災でほぼ全壊した。当地区の復興にあたっては、この道の再生を重点目標の一つとし、まちづくり協定や各種住環境整備手法を活用し、専門家と行政及び住民、企業、開発事業者が協調し、酒蔵の道の再生に取り組んでいる。

・検討中のまちづくり構想（案）



〇復興すまいづくり

<4件の共同建替えが事業化へ>

当地区では、現在4件の共同化事業が工事着手に向けて進んでいる。

当地区は、神戸市六甲地区住宅市街地総合整備事業区域であるため、4件とも住市総の共同化補助事業として推進している。

1) 共同建替え型ミニ・ハーフ区画整理

①、②の3丁目-A、Bは、共同化としては別々に出発したが、敷地が隣接しているため、その後一体開発として、幅員3mの公道を廃止し、新しく4.3mの公道を付け替える作業を進めている。④の4丁目-Dも、幅員2.5m未満の公道を幅員4.3mで付け替える計画を進めている。このため、敷地面積は減少し（減歩と言え）るが、権利者は共

同建替え事業が成立する条件と引き替えに納得している。

2) 同一「デベ」で事業推進

同一地区内で近接して複数の共同化が進められていることから、同一ディベロッパーで事業の推進を図っている。

事業推進にあたっては、表に示すような、地元権利者、行政、総括コンサル—専門コンサルグループ、ディベロッパー、ゼネコン等で体制を組み、特に建築設計士、測量・開発申請（土木技士）、不動産鑑定士、司法書士、弁護士等の専門家によるプロジェクトチームを組織し、事業推進のための対応を図っている。

3) まち並みに配慮した建築意匠

4件の共同化建築物は全て旧西国浜街道に面して立地しており、建築物や工作物、外構等の意匠は「酒蔵のまち」「歴史街道沿いのまち並み」のイメージを持った内容となるよう努めている。

<官民協働の賃貸住宅の建設>

⑤の4丁目-Eは、木造長屋の倒壊跡地における耐火造賃貸共同住宅の再建事業で、地主（見掛氏）と神戸市住宅供給公社の協働による特目賃（災害復興特定目的借上公共賃貸住宅制度—地主が建て、公社が管理運営し、従前借家人が再入居出来る）事業である。

比較的老人が多く、かつ、木造賃貸住宅が多かった当地区にとっては、このような地域貢献型住宅建設への期待は高い。

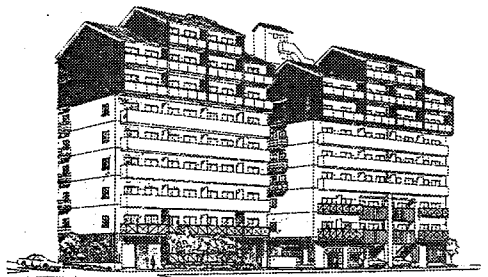
<次への展開>

今回報告した共同建替え事業等は、春から夏にかけて着工を予定しており、現在はボーリング、実施設計段階に入っている。

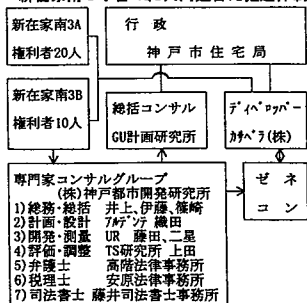
次の展開としては、本契約、工事段階に入っていくとともに、コーディネート業務としては、共同ビルの維持管理方策の検討を始める一方で、未着手敷地への掘起こし作業を行って行く必要があると考えている。

・酒蔵のまち並みを意識した建築意匠（案）

・3丁目A・B棟



・新在家南3丁目-A、B共同建替え推進体制



新在家南地区内共同建替え等事業計画一覧 (H.8.2.10現在)

所在地等	敷地面積	権利者	容積率	延床面積	計画戸数	事業手法等
① 3丁目-A	約720㎡	A-18人 AAA 2人	300%	2,420㎡	32戸	等価交換 住市総共同化
② 3丁目-B	約650㎡	A-1人 BB 9人	300%	2,020㎡	32戸	等価交換 住市総共同化
③ 2丁目-C	約780㎡	A-10人 AAA 3人	200%	1,520㎡	24戸	等価交換 住市総共同化
④ 4丁目-D	約500㎡	A-4人 AAA 1人	200%	1,200㎡	15戸	等価交換 住市総共同化
⑤ 4丁目-E	約770㎡	A-1人 BB 1人	200%	1,300㎡	24戸	特目賃

住市総：住宅市街地総合整備事業
特目賃：災害復興特定目的借上公共賃貸住宅制度

マンション自力再 建体験記

ーグリーンハイツ住吉の再建ー

関西建築家ボランティア
野崎 隆一

NOZAKI, Ryuichi

(遊空間工房)

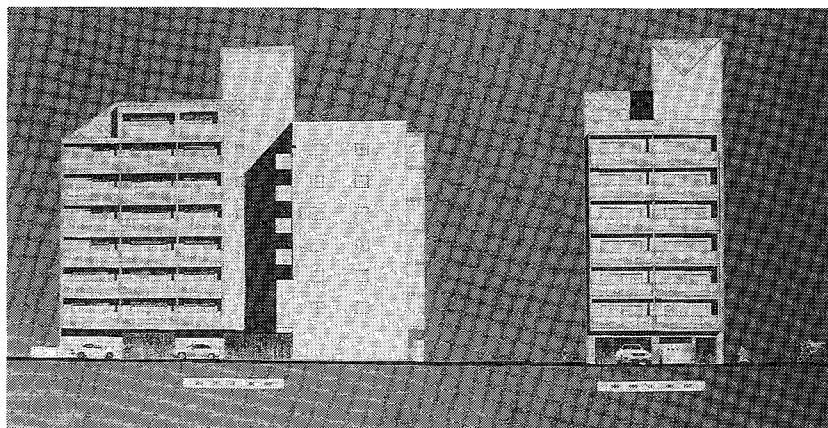
旧くからの友達である重村力神戸大教授から突然電話がかかってきたのは、去年8月の事だった。「被災した自分のマンションを住民達と一緒に自力再建したいので、事業コーディネートをしてくれないか」と言われた。震災後のボランティア活動の中で勤めていた会社を辞め、東灘区の白地無指定地区の住宅共同再建の支援に奔走していたが「自力再建」という言葉に強く動かされるのを感じ、8月27日のマンション総会に顔を出す約束をした。当日、会場の茶屋会館に出かけると、ほぼ住民の全員が集まっていた。再建組合理事長のあいさつに続き、そのまま新しいコーディネーターとして紹介されてしまった。

自力再建を説明するために、再建方式の整理をしてみると、次のようになる。

1. 全部譲渡方式／組合員の土地持分を一旦デベロッパーが全部取得し、事業主となって新しいマンションを建設し、完成した後、組合員が建物と土地を買い戻す。事業方式としては最も安全であるが、保留床売却益はデベロッパーの利益となり組合員の金銭メリットは少ない。
2. 事業代行方式／組合員は土地の権利を保持したまま、保留床の売却、建設工事の発注をデベロッパーが代行する。事業の保全策を講じておく必要がある。デベロッパーの事務経費が組合員の負担となる。
3. 自主再建方式／再建組合が事業主となり、建設工事の発注等の事業遂行を直接行う。事業の保全が難しい。優建補助に関しても、公庫融資の面でも、組合自体の結束力、事業遂行能力が問われる。

引き継いだときには設計者は決まっており、事業協力者も工事代金立て替え等の好条件を出したゼネコンに決まっていた。住民はここからは自力で再建できると判断し、自ら事業主となる道を選んだ。しかし道は平坦ではなかった。9月1日に住宅金融公庫を訪問した時点で、その問題は明らかとなった。1つは住民の任意団体にしかすぎない再建組合を、マンション建設の事業主として認定するのは難しいということ、もう1つは保留床を売却して、その利益を得ることが、宅建業法に触れる可能性があるということであった。

マンション再建案（西側・南側立面図）



神戸市住宅局を訪問すると、やはり同じことで、事業主が再建組合という任意団体であることに難色を示した。要するに任意団体の事業遂行能力に信用がないということであった。神戸市の優建補助事業の書類の中に、デベロッパー名の記入欄が設けられていることから考えても、その時点で「自力再建」は行政の絵の中にはなかったといえる。

まず着手したのは、全員の資金調達が可能かどうかを調べることであった。9月いっぱいかけて2～3回にわたり個別のヒヤリングを行った。抵当権の残っている人が約半数、高齢や低収入でローンの借りれない人が20%いることが分かった。抵当権の抹消ができる人には10月末までに残債を返してもらい、ローンの借り入れのできない人の資金調達計画を急いだ。

次に手を付けたのは再建基金の設立であった。再建組合の法人化は27戸のマンションでは無理とのことなので、自己資金の拠出により5,000万円程度を目標に提案した。結局1人当たり20～1,000万円の拠出で、3,400万円が集まり最終的には5,700万円に達した。これにより、調査設計費については借り入れ無しでいける見通しがついた。

権利変換の際に問題となったのは、元の地主Aさんが建物住戸2戸のほか、地下の店舗と1階駐車場を専有所有しており、基準法の改正により地下店舗分の容積が上積みされることで生じる保留床の売却益が、他の組合員に還元されないことと、駐車場の専有所有という区分所有法になじまない形態を修正しようとする、他の組合員は土地持分をAさんより買い取らねばならず、負担はその分上乗せとなることだった。一方Aさんにとっても権利は大きくあるものの、従後も駐車場の権利を取得しようとすれば土地持分割合で建設費を負担することになり、大きな借金をしなければならなくなる。また、双方に共通の問題としては、駐車場が共有部分でなくなれば優建の補助金の対象から除外されるため、補助金受取額が減ってしまうということがあった。そこで駐車場の専有面積を半分に評価する案を提示し、双方に納得してもらった。Aさんは駐車場に対応する土地持分の50%を他の組合員に無償譲渡し、従後のマンションの駐車場は共有にすることで、建設費負担を軽減するということが了解してもらった。

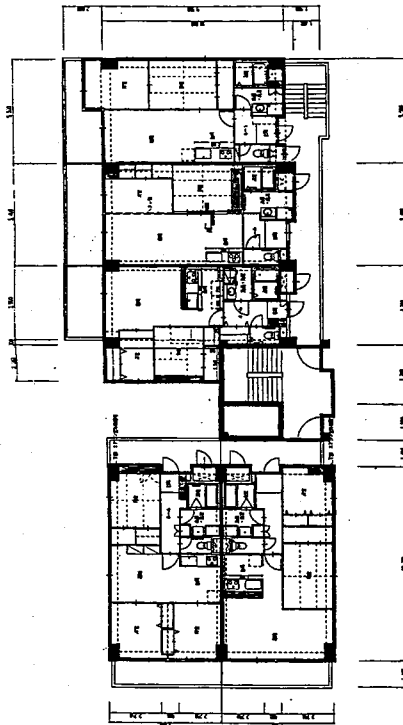
保留床の処分については、コープラティブ住宅の事業参加者を募るということで組合員自らが、参加者をさがして2ヶ月かかったが4軒の入居をきめた。

改めて、これらのデータを添えて行政を訪ねたところ、評価が一変し前向きに検討してもらえるようになった。工事中の不測の事態に対する保全策についても、いくつかの方法を検討した結果、対策を講じることができた。

現在、来年3月に完成に向け工事も始まっている。自力にこだわった事で、一見回り道をしように思えるが、個々の負担が少なくすんだばかりではなく、各々がやっていることの意味を良く理解して取り組めたことで、かえってスムーズにこと

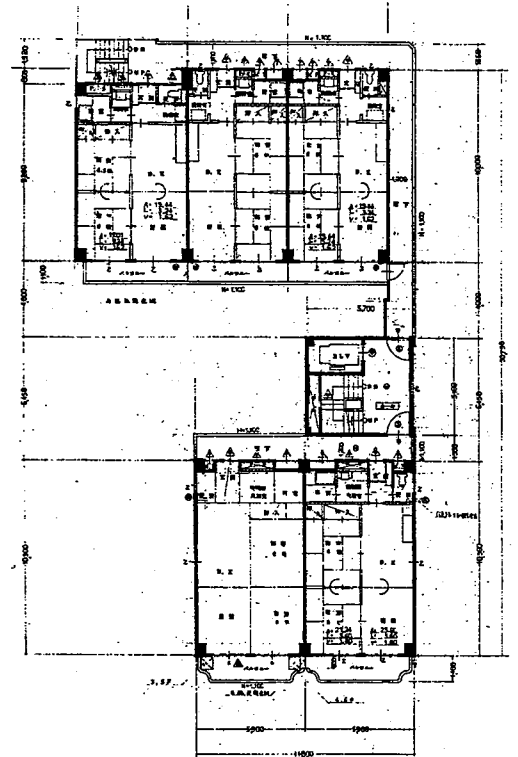
が運んだともいえる。『コミュニティは才能の宝庫である』ことも、ここで学んだ。マンション建て替えを都市における共同体の再建という視点で

とらえるなら、これはまさしく『まちづくり』でありその意味で、私にとって啓示に富んだ日々であったといえる。



再建「グリーンハイツ住吉」の基準階平面図。北棟を90度回転させて西向きにした。北側のマンションへの日影についても配慮できた。

設計：SD設計室 佐古誠司



被災した「グリーンハイツ住吉」の基準階平面図。北棟東端の部屋が日照的に不利であった。

特集 被災地の春4

《コレクティブハウジング》ってこんな住宅、住まい方

コレクティブハウジング事業推進応援団
石東 直子

ISITO, Naoko

(石東都市環境研究室)

◆震災被災地に今必要な住宅のために

被災地での仮設住宅住まいが始まってから10カ月を迎えてようとしているが、仮設住宅での高齢者の独居死や中高年者の震災苦による自殺者が後を断たない。一日中誰とも触れ合わずに、部屋のなかで孤立して過ごしては、明日への気力が沸いてこない。

安全で安心して住み、生きる気力を取り戻せるような住宅供給が、今、最緊急課題である。今後、多くの人が仮設住宅から災害公営住宅に移り住むことになる。その後にもまた、同じような悲劇が繰り返し続かないように、“コレクティブハウジン

グ”の提案をし、その事業推進に向けての応援活動を展開している。

◆《コレクティブハウジング》とは

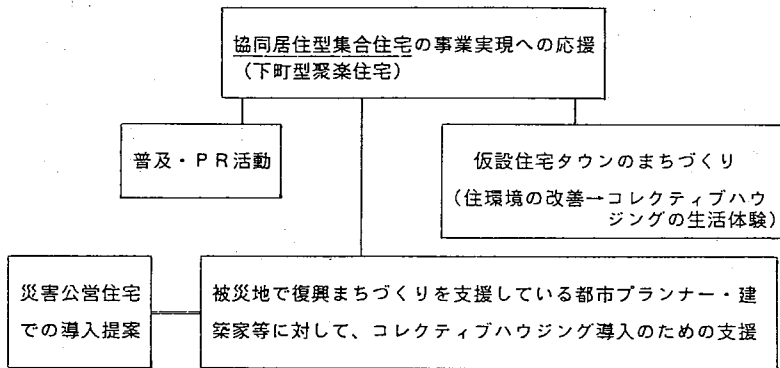
「いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる」、「ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう」という住まい方の《協同居住型集合住宅》である。

すなわち、コンパクトであるが、それぞれが独立した複数の住戸(住宅)と、その延長としての共有スペース(共同室)が組み込まれた集合住宅であり、共有スペースを核に協同生活が展開される。

個人の自由で、自立した生活を前提としながら
日常生活の一部や生活空間の一部を
共同、共有化することによって
個人や小家族では充足できない
合理的で、便利で、楽しみと安心感のある
集まって住む暮らしのかたち

集まって住む安全性と安心感
豊かな共有スペースをもつ快適性
共同家事室をもつ合理性
共同の家事分担の便利性
そして集まって暮らすことの楽しさ
高齢化、環境問題に対応したくらし

◆《コレクティブハウジング事業推進応援団》とは 阪神大震災からの再起をめざし、主に公共集合住宅の建設に際して、《協同居住型集合住宅＝コレクティブハウジング》の導入の実現化のために、日本の生活文化に対応した日本型コレクティブハウジングや被災地での復興住宅型、民間型などの検討を通して、コレクティブハウジングの事業推進を応援する集まりであり、9月に発足した。都市プランナーや建築家の他に、コレクティブハウジングに関心をもついろいろな分野の人たちが参加するNPOである。月一回程度の会合をもち、毎回30～40名の参加の下、会の目的にそった意見交換、普及活動を行っている。



コレクティブハウジング事業推進応援団・第4回ミーティング<議事内容>

●会議の概況

- ・日時：1995年12月9日14:00～17:00
- ・参加者：約40名
- ・くらし再建へ「いま」見えて～市民とNGO「防災」国際フォーラム～の参加として開催
- ・ロビーにコレクティブハウジングの事例と仮設住宅の住環境改善アイデアについてパネルを展示
- ・2時間半以上に及ぶ活発な意見交換があり、その後パネル展へのツアー

●討議内容(省略)に対する団長としての見解

1. コレクティブハウジングはライフスタイルの選択であり、このような住まい方を必要とする人、賛同する人に提供されるのであって、賛同しない人が無理に住む(住まわされる)住宅ではない。従って、本日出された意見の中で、否定的な意見は余り気にする必要がない。
2. 協同(協働)居住のルールは、居住者同士が決めていくことが大切である。そのための協同居住の学習と協働のトレーニング、協同生活運営の規則づくりなどの期間とアドバイザーが必要であろう。
3. 食事を共同化することへの否定的な意見が多かったが、北欧の事例として食の共同化を核にしたものが紹介されているのが多いが、北欧の場合でも食事は必ずしも中心的な協同生活とはとらえていない事例も多い。ディナークラブを作って、自由に参画しているケース、週2回程度

の夕食のみ協働チームでやるケース、レストランなどの外部の食事サービス機構と連携しているケースもある。

4. 「日本的な食文化からみて食事の共同化は難しい」という(否定的)意見があるが、これは実際に食事づくりに苦勞していない人(誰かがいつでも用意してくれている人など)であろう。自立して生活するという姿勢ではなくて、誰かに支えてもらって生活する視点である。あるいは、食事にあまり関心をもっていない人、反対に自分の食事にすごくこだわっている人かもしれない。しかし、ひとり暮らし、小家族、男女協業家族では、週のうち何回かの食事の共同化のメリットは大きい。

5. 今、被災地ではひとりで生活しなければならない人が多い。生活をシンプルにして、相互扶助をしながら安心できる心強い生活を望んでいる人が多い。

《いつでも誰かに会えるし、いつでもひとになれる》、《集まって住む安全性と安心感、集まって暮らすことの楽しさをもつ》、《共に住む、共に生きる、共に創る、相互扶助の暮らし》というコレクティブハウジングは、高齢者、ひとり暮らし、単親世帯にはとくに適した暮らし方である。仮設住宅の多くの高齢者等が災害公営住宅に移り住むことになるが、そこでまた孤独死や生きる気力を取り戻せずに自殺していく人が続出するようなことが繰り返されないために、簡易型コレクティブハウジングであっても、まずは公営住宅での早急な実現が望まれる。そこから本格的なコレクティブハウジングが、公的住宅や民間住宅にも芽生えていくことになるだろう。

6. 被災した人たちは人間が変わった。変わって、新しい生活をしようとしている人が多い。大震災は新しい暮らし、人間関係を考えていくひとつの大きなきっかけになった。辛い体験であったが被災地からコレクティブハウジングが育っていく機運がある。(年末に長田区の仮設住宅居住の高齢者との座談会をもった。そこで強くしなやかに生きようとする方々に出会い、明るい気分になった。――なお、この様子については「きんもくせい」23号に掲載している。)

●コレクティブハウジング・パネルリスト

- 01 コレクティブハウジングとは
- 02～03 事例 フェルト・タペーン
- 04～05 事例 プレスト・ゴス・スー・ゲル・レインボウ
- 06 事例 近隣女性ネットワーク
- 07 事例 コモンズ・キルバ
- 08 事例 ゲイ・セント・ロウ・ゲイ・ジョン・ティーン・ベ・アレント・ネム
- 09 事例 ゲスト・ホスト・コミュニティ・リー・グッド・ウィング・デイズ
- 10～11 事例 しあわせ荘、サニーハウス驛方
- 12～13 事例 呉川町ケア付き仮設住宅
- 14 仮設住宅タウンの改善 呉川町仮設住宅タウン現況
- 15 仮設住宅タウンの改善 瀬戸公園仮設住宅タウン現況
- 16 仮設住宅タウンの改善 提言



パネル展の様子

ランドスケープ復興支援会議発足

ー阪神グリーンネットワークー
ランドスケープ復興支援会議
中瀬 勲

NAKASE, Isao

(姫路工業大学自然・環境科学研究所、兵庫県立人と自然の博物館環境計画研究部)

●緑のネットワーク発足

2月6日、ランドスケープ復興支援会議(通称:阪神グリーンネット 代表:近藤公夫氏)が発足しました。小森星児氏、林まゆみ氏、及び筆者が呼びかけ人となって、ランドスケープ関連の技術者、研究者等が集まりました。阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク発行の「きんもくせい」23号で紹介された「あなたの家の垣根からはじめよう-安心な環境づくり」を作成した「ヒューマン&ネイチャー・ネットワーク」、林氏の復興プランAグループなども含み、ランドスケープ関連のネットワークを一元化し、被災地での専門家派遣の要請に応えようとするものです。

●活動の内容と目的

メンバーは現在37名(増加中)で、コンサルタント会社、造園施工会社、大学等で働く人々で構成されています。当面の活動内容として以下の3つを掲げています。

①専門家派遣

都市計画事業地区を中心に立ち上がったまちづくり協議会等へ、講師あるいは派遣コンサルタント、ボランティアとして参加し、公園や街路に関するコンサルティング等の諸活動を行います。現在人材のデータ・ベースづくりを行っています。

②垣根づくりなど緑化推進活動

最初は被災地へ出かけてモデル的な生垣をつくります。「ちょっとお金もかかるし、手間もかかるけどやってみるか」と思って頂ければ成功です。白地地域を主に対象とします。詳しくは「きんもくせい」23号の上記マニュアルの記事をご覧ください。

③野菜畑づくり、壁面・屋上緑化活動

仮設住宅に出かけて、野菜畑づくり、壁面・屋上緑化活動をします。野菜畑はその成長を楽しむだけでなく、何と言ってもできたものを食べることができます。何かの集まりのきっかけになればと思います。屋上緑化は来る暑い夏に備えるため、現在、技術開発中です。

●花咲かせ隊、野菜畑耕作隊、大募集

上記の②③は施工技術者等々専門家のアドバイスを受けながら行うのですが、多くの人手が必要です。そこで、「花咲かせ隊」「野菜畑耕作隊」と称して大募集したいと思います。現在、既に千

葉大学をはじめ遠方の大学や人と自然の博物館ボランティアから参加希望を頂いています。

現在、以下の活動日が決定しています。

- ・2月24日 人と自然の博物館東側駐車場跡地にて パンジー 2万6千鉢の配布(盛況裡に終了)
- ・3月31日 神戸・岡本でひまわりの種まき応援
- ・4月6日 仮設住宅地などへの野菜畑づくり、花壇づくり など

興味のある方は、やりたいことと連絡先の名前・住所・電話番号・ファックス番号を郵送あるいはファックスで下記へご一報下さい。

〒669-13 三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館内
FAX. 0795-59-2024
阪神グリーンネットワーク事務局: 藤本

もちろん、①に関してもご一報下さい。

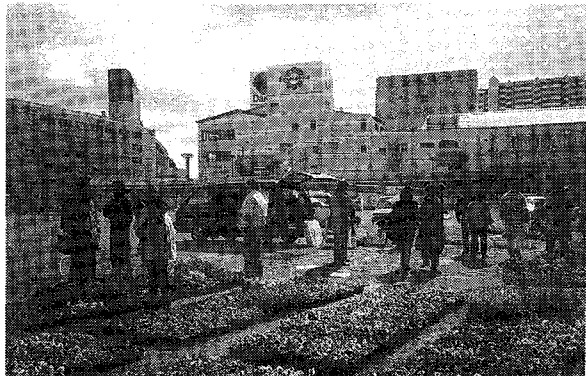
●一宮からパンジー2万6千鉢到着

まだまだ寒く雪も降る三田。愛知県一宮の角田ナーセリーグループから、大阪植物取引所の緑会の協力でパンジー2万6千鉢が2月17日の昼頃、人と自然の博物館に到着しました。「被災地ではこれだけの量を置くところがない。」ということで、趣旨をご理解いただいた北摂整備局のご好意で東側の駐車場跡地に置くことになりました。この寒さに耐えられるかどうか心配されましたが、何とか24日の配布までもちました。

当日は多くの方が早朝から集まり、早くも10時過ぎには予約を含め配布が完了しました。芦屋、尼崎、鷹取(野田北部)、岡本、魚崎、松本、兵庫駅前の各地では、地域ぐるみで仮設に配ったり広場に植えようということで、地域の方々がまとめて苗を取りに来られました。

*

とにかく動き出しました。このネットワークで情報を交換し、活動しながら方向や次の活動を決めてゆくことになるでしょう。プランナー同士、あるいは地元住民との協働作業や議論をまず始めなくては…。



一宮の角田ナーセリーなどから贈られた2万6千鉢のパンジー

アメリカのランド スケープデザイン 事情 (その5)

三谷 康彦
YASUHIKO MITANI
国際委員
PWWJ



前号までに述べてきたように、アメリカのランドスケープ・アーキテクト事務所はランドスケープのデザインそのものを業とし、植物や土壌、生態あるいは土木、構造等の専門家ではない。例えば、植物の専門家は PROFESSIONAL HORTICULTURIST、土壌の専門家は PROFESSIONAL AGRONOMIST というれっきとした職業が存在するし、CIVIL ENGINEER、STRUCTURAL ENGINEER 等は言わずもがなである。また、植物の専門家 PROFESSIONAL HORTICULTURISTの中でも湿地帯植物に詳しいWETLAND SPECIALIST、都市内樹木に詳しい URBAN ARBORIST、植物の育種・栽培に詳しいARBORICULTURIST等といったふうに、各々の専門分野にさらに細分化されている。

ランドスケープ・アーキテクトは、それらの専門領域のプロフェッショナルの中から、デザインを「実際の物」につなげていく為のデザインの・技術的検討に最も必要となるプロを見つけ出してコラボレートすると言う話は、前号で述べた。その際に、「なに」の為の技術的検討が「どの程度」必要となるのかの判断は、逆に「その」検討が行われなかったならば、結果的にデザインにどのような問題が生じるかをあらかじめ予測することによって行われる。

日本においてのプロジェクトを進める場合、常に突き当たったのが各種専門領域に関してのプロフェッショナル・コンサルタントの絶対的な不足であった。

土壌の場合の問題点

日本には、驚く程たくさんの数の土壌改良材メーカーが存在し、輸入資材も含めてありとあらゆる製品が入手可能である。また、メーカー・サイドでは自社製品を使ってもらうことを前提に、計画地の土壌成分の化学的物理的分析に始まって、その分析結果に基づいた土壌改良材の混合比率等の提案までの、無料のコンサルティングを、行ってくれる。デザイナーはといえば、電話一本メーカーに連絡さえすれば営業マンが飛んで来てくれ、概略を話せば全て飲み込み顔、あとはメーカー・サイドで良きに計らってくれることとなる。その数日後、営業マンからの検討結果の報告および提案を、デザイナーは設計仕様書に盛り込んで、土の検討に関しては一巻の終りとなる仕儀。

ランドスケープの設計料の不足しがちな昨今、便利といえば便利なシステムではあるが、ここで気を付けなければならないのは、メーカー企業が営業マンを雇い、カラフルなパンフレットを作ったりの営業経費は、間違い無く製品のコストに上乘せされているということだ。つまり本来的には、デザイナーが自らの設計料の一部を使って雇い入れたサブ・コンサルタントによってなされるべき検討作業が、メーカーによって肩代りされることにより、設計料の一部として当然コンサルに流れるべきお金が、メーカーの製品代に含まれるオーバーヘッドとして化けてしまい、メーカーはま

まず元気になるいっぽうで、コンサルの相変わらぬメーカー依存症は治りようもないのだ。

しかしながら、ランドスケープのプロジェクトがどんどん複雑なものになっていくのに従って、遅ればせながらではあるが、「つつ」に関しての専門的な検討・助言ができるコンサルタントも、ぼつぼつ設立されているようであるし、また大学に属する研究者の中にも基礎研究をしっかりと押さえたうえでデザイン・アプリケーションにも興味を示してくれる中堅研究者が何人かいてくれるのは、我々にとって本当にありがたい。ただ少し気になるのは、大学で基礎研究に興味を持つ若手研究者が年々少なくなって来ているという話だ…。

植物材料のプロフェッショナル

植物に関するテクニカルなアドバイスを、デザイン・アプリケーションの中でしてくれる専門家の不足を、痛切に感じた一例を、次に述べたい。

日本庭園では良く使用されてきたモウソウチク、苔といった、ある意味では使い古された植物材料を、PWWJではIBM幕張プロジェクトにおいての全体のデザイン・コンテキストの中から、常識では考えられないような植栽デザインの中で使用していたようだ。(と、人事の様に言うのも、私がPWWJに入所する前に、設計図書は完成していたからだ。)

そもそも、大量のモウソウチクを単幹で(モウソウチク等の竹材料は一般には鉢に数株生えている)、しかもグリッド・パターンで植栽する等と言うことは、今まで誰も考えた事が無かっただろう。また、苔をストライプ状に平地にべったりと絨毯の様に敷き詰めるというのも、日本では重森三玲氏以来の斬新な発想ではなかろうか。

しかしながら、「斬新な発想」を実際の「物」とし、時間経過のなかでも見るに耐え得るようにする為には、少なくとも素材そのもののデザイン・アプリケーションが適切なものかどうか、あるいはデザイン・アプリケーションの為の素材の技術的検討がなされているか、といったフィードバック検討が、設計段階で必ず行われる必要があるのは言うまでもない。

一般に、モウソウチクは植物材料としては自然の竹林風に植栽されたものを、日本では良しとするのは皆様もよく御存知のとおりであり、京都あたりの竹の植物材料をよく扱っている「専門家」に意見を求めても「竹は自然風に植栽するもんです。それが竹の一番きれいな見せ方です。」の一言。コンサルティングも何もあったものではなかった。そんな事は分かり切った上で意見を求めているのであり、なにも「デザイン」してくれと頼んでいる訳ではない。我々が求めているのは、「デザイン」を理解したうえで徹底的に技術論的な、プロとしての意見なのだ。

すなわち、モウソウチクを単幹・グリッド植栽

にするとすれば、一般的なマス植栽と異なり、一体どのような竹材料の仕様とすればいいのか、特に土には何が求められるのか、将来的にはどのような形としていくのか、根の広がり防止はどうするのか、支柱はどの程度の強度のものが、いつまで、どれくらいの高さの位置で結束されるべきなのか、竹に必要な更新はどう考えればいいのか、そもそも単幹・グリッド植栽はデザイン的・技術論的にみて本当に妥当なものなのか……等の疑問に対しての、技術論的なアドバイス、あるいはデータの呈示といったサポートが必要であったのだ。

竹に関してのコンサルティングをして頂けるプロを探す為に、さんざん走り回ったあげく、幸いにも、竹に関する基礎的な研究をされており、しかもデザインに関しても理解の深い、京都大学農学部演習林の柴田昌三博士を得て、上記に挙げた全ての疑問点は解明された。

その具体的な技術論に関しては、専門的過ぎるので、ここでは述べない。

また苔に関しても、その昔私が京都で庭師修行をしていた頃、経験的に、通称「スギゴケ」と呼ばれるものの中でも日向でも良く育つものと、日向では絶対育たない種類があったのを憶えている。おなじ「スギゴケ」でも、丹波の方の栗農園の地面にグランドカバーとして自然に生えている苔を山取りしてもらったものは日向でも強く、四日市あたりで大量生産され、リング箱に詰められて売られている四角い分厚いマット状の苔は、日向では全然だめであったし、へたをすれば日影でもうまく育たなかった。

私の個人的経験観測からの疑問を、明解に説明してくださったのが、在野の苔類の研究者として半世紀もの経験を持つ、小松市の大石鉄郎先生であった。

先生によると、通称「スギゴケ」と称されて売買されている物のなかには、スギゴケでないものが混ざっているのがほとんどとのこと。また、「スギゴケ」のなかにも「コスギゴケ」「オオスギゴケ」「ウマスギゴケ」があり、それぞれで日照条件に対する好みが違うこと。「スギゴケ」は一般に湿った所に生えたと信じられているが、そうでは無く逆に乾燥した所を好み、スギゴケを枯らす多くの原因は逆に水をやりすぎる事にあること。つまり、水をやりすぎると湿度を好むビールスが増殖し、それによる毒によって苔が枯れるのだそうである。その他にも、先生からは、永年の観察・経験より得られた貴重なお話を、たくさん聞かせて頂くことが出来た。

一般の常識として知られていることの中にも、いかに間違っただ事が多いか。したがって、「常識」には常に疑問を持ち、科学的態度で臨む必要があるか、を自分自身の肝に命じた次第である。また、最も日本的なランドスケープの素材としての苔に関してでさえも、その栽培などの実務に即した研究・データを探し求めて大学の研究室を尋ねまわった結果、いかに研究が遅れているかを知

り、おおいに驚いたものである。洋物のグランドカバー植物の輸入も大いに必要であるし結構であるが、日本には苔やシダといった菌類が良く育つ風土であるし、景観的にも良く似合うと思われるので、ぜひともそういったグランドカバーを見直し、研究・開発が進められる必要があるのではないかな？。

ちなみに、大石先生の「苔類研究所」の駐車場の横で、全日照の条件でしか育たない大石先生によって品種改良された「オオイシ・ウマスギゴケ」が、真夏の炎天下で緑々と育っているのを見て、おおいに感動したのを思い出す。こんなに有用な造園材料が、まだ日本には眠っているのだ！！

このように、IBM幕張プロジェクトの工事完了後に発生した、数々の植物に関する問題解決の為に、PWWJの日本人スタッフとして奔走するはめになった私を、励まし、また忍耐強く見守って下さった、谷口建築設計研究所の皆様、また日本IBMの担当者の方々にはこの場をおかりして、厚くお礼を申し上げます。

丸亀駅前広場プロジェクトで考えた事

日本都市総合研究所の加藤源氏による駅前再開発プロジェクトで、ランドスケープのデザインに関してPWWJが協力した。言うなれば、「計画」×「意匠(デザイン)」×「手法(しくみ)」の各々がうまくバランスがとれて融和した成功例と思う。また、加藤氏の手腕により、環境整備の対象を駅前広場のみに限定させること無く、その周辺までも含めてセット・アップして頂いたうえでのランドスケープ・デザインであったために、仕事としては非常にやりやすかった。

また、基本設計、実施設計およびその後の監理も含めて、PWWJで作業させて頂いたし、特記仕様書までも含めてPWWJサイドで細かく書き込ませて頂くことが出来たのも、特に大きな問題が発生しなかった原因のひとつでは無かったかと考えている。

あえて残念に思うことを挙げるとすれば、広場部分のストライプ模様舗装の中に組み込んだ表面排水用のエリア・ドレインへの絞り込み勾配が少し強すぎたために、平らに見えることがデザインの重要なポイントであった広場表面が、心持ち波打って見えることぐらいかもしれない。

いずれにせよ、PWWJによる、時にはキメ細かすぎるとも思われる工事中のデザイン監理のやりかたにも、多忙な加藤氏自らが、気長に、しかも寛大に、常時つき合って下さったのには本当に頭が下がった。また、施工管理に協力して頂いた、大阪の都市景観設計事務所の奥村信一氏には、大変お世話になった。

ここで、工事完了後まで尾を引く事となる、樹木の支柱の話を、少し紹介しておきたい。

JRの丸亀駅舎の前に列植されたユリノキのみならず、すべてのホウキボブには、廻りを舗装

で固められたアーバンな条件下でも植物が健全に生育出来るように、約6立方メートルの植栽用の良質土が、舗装基盤の為に転圧されてしまうことの無いように、大きなペーピング・カバーの下に確保されている。これは、樹木が健康に育ち、大きくなり、樹木の一生を全うする為に、根が必要とする土の量を（十分とは言えないが）最大限に確保しようとして用意されたものである。この装置のおかげで、ポプラは順調に育つことになったが、今度は逆に、ポプラの生育が良過ぎたために、想像していなかった新たな問題点が発生した。

その問題点とは、メインテナンスに入った造園業者によって、どんどん背が高くなるポプラの成長に従って、とてつもない高さまで、添え木支柱がされたことだ。

もっともこれは、全てのポプラが通直に育つようにと、良かれと思ってなされたとの事。そのために、逆に、強風時に幹がたわんで自らのたわみにより風を逃がすことが出来なくなり、台風時に倒木が続出したと言う。その為に、今度は倒木を防ぐ為に、足元に四脚鳥居形の超強力な支柱が用意されたようだ。樹木は、風によって、地上生え際部分が若干揺らされることによって根を張っていくという、樹木生理の大原則に反した事が、メインテナンス業者の誤った経験論に基づいた判断により、良かれと思ってなされてしまった訳だ。

樹木の幹の形状は下から上に向かって先細りになっており、その事によって風が吹けば、幹はたわんで風の直接的な力を逃す。しかしながら、添え木支柱がされると、添え木の先端までは先細りにならず、ほぼ下部の幹と同じ太さで成長する事が知られている。そして、添え木支柱の切れた上の部分で急激に先細りになるために、強風が吹けばその部分で折れることとなるか、或は支柱もろとも転倒することとなる。

こと樹木の支柱に関してでさえも、公共事業では、習慣的に標準図的な作業が行われるか、あるいはメーカー仕様の地下式支柱かの、どちらかのオプションしか無い。樹木にとって最も適した支柱とは、一体どの様なものなのかを探る基礎的な研究は、私の知る限りでは、日本では、いまだに行われていないようだ。

もっとも、ランドスケープの場合の樹木支柱そのものは、確かに樹木の活着までの一時的な物であるはずであるが、それでもプロジェクト完成時に、あまり支柱が目立つのも感心したものではない。また逆に、都市的ランドスケープ状況の中で、特に街路樹等には、とても支柱が必要とも思えない様な高木にまで、セミの様な支柱が縛り付けられており、それを見れば誰でも奇異におもうはずだ。あるいは、この支柱でも台風の時には役に立ったと言ひ張る人がいるとすれば、上記のパラドクスを謹んで捧げたい。つまり、樹木自身の根によって、その地上部分が支えられるように育てて行こうとする態度が絶対に必要で、その場合、植栽帯をうんと大きくするか、あるいは根の張って

行ける場所を舗装の下に、金をかけて作るかのどちらかしかない。

このように、樹木の支柱を研究することは、樹木の根を研究すること、根の張って行ける土壌を研究すること、植栽用土として必要な65~70%のコンパクションと舗装基盤として必要な95%のコンパクションの両方を満足させる土の研究をすること、といった研究にも広がって行き、非常に含蓄に富んだ分野であると思うが、いかがであらうか？

そういえば、昨年12月に訪日した際、東京駅丸の内側から乗ったタクシーの車窓より、丸の内駅前大通りに植栽されているイチョウの、何ともみっともなかった添え木支柱と鳥居支柱が取り払われているのを見て、ほっとしたのを思い出す。これは、どなたかが樹木の支柱に関する基礎研究の成果を発表され、新しく青島都政になった都の道路管理課あたりで早速行動にうつされたものであろうか？ぜひ、その真偽を知りたいものである。

また、「風」と「樹木」の関係で考えると、日本古来の剪定の技術は凄いのであったと思う。剪定技術の代表的なものに、京都風のさりとした「すかし」技術と、それとは対象的な大阪風のボツボツした「かりこみ」技術がある。それぞれのスタイルの好き嫌いは別にして、いずれも風の力を樹木でもろに受けずに、どうやって力を逃すかを考えたものであろう。台風が、必ず二百十日頃にやって来る日本で、昔からの倒木等の被害を最小限度に食い止めるために考え出された枝減らし・葉減らしの技術で、古人によって時には芸術的とも思える程までに美的に洗練されたものが

「すかし」であり「かりこみ」であったのではないかと思う。そういえば、少し前までは、日本では、毎年繰り返すメインテナンスそのものが、大自然と共生する「文化」そのものであったのだ…

それとは対象的な話をひとつ。昨年12月の訪日を終えてサンフランシスコに帰り着き、空港から乗ったタクシーの窓から、無惨にも枝の折れた、多くの樹木をハイウェイ280号沿いに眺めていた。そういえば、日本のホテルでのCNNニュースで、1週間程前ベイ・エリアで何十年ぶりの強風が吹いたと言っていた。強風が吹いても、樹木は倒れずにしっかりと大地に根を張っており、不要な枝の一二本を折って生き残るというのは、いかにもプリミティブで荒々しい、自然流の「すかし」の方法ではないか！これぞまさしくアメリカの文化そのものではないか……そんなことを、時差惚けで朦朧とした頭で考えていた。

播磨科学公園都市・先端技術センタープロジェクトで考えた事

兵庫県より委託を受けた磯崎アトリエに協力するかたちで、PWWJが庭園および外構部分の基本計画・基本設計を行い、ヘッズ大阪事務所が実施設計を行った。実施設計図面集のレビューも数度にわたってPWWJでさせていただき、ヘッズの皆様にはその間ずいぶんとお世話になった。磯崎アトリエサイドのプロジェクト担当者、設計組織A・D・Hの渡辺真理氏にはデザイン面でもいろいろなアドバイスを頂いた。また、工事期間中もPWWJでデザイン監理、ヘッズで施工管理をと、磯崎アトリエより全面的に委せて頂いたのも、非常に質の高いランドスケープとなった一因ではないかとも思っている。兵庫県サイドの担当者も非常に協力的な方であったし、建築工事監理の随契としてのランドスケープ工事監理であったのもPWWJにとって幸いした。工事金額が増額とならないのを条件として、工事期間中にかなりの設計変更を認めて頂いたのも、建築発注であったからであろうし、またその設計変更に対しても快く対応して下さい工事担当ゼネコンの皆様には、本当にお世話になった。

思い返せば、PWWJでの基本設計のデザイン・スタディー時に、宿泊棟のコートヤードのなかの幾つかのエレメントに関してピートが「ふたつの象徴的な山と、質の違う三本の線で空間構成をしたい」と言いながら、何枚もスケッチを描いていたのを思い出す。(図-1参照)ふたつの象徴的な山とは、むろん石山・芝山として具現化する。また、質の違う三本の線は、直線に並べられた飛び石によるライン・直線に並べられた太い丸太によるライン・そしてしっかりとした厚みのある黒御影によるラインによって翻訳しなおされている。(図-2参照)

石山の石積みパターンは、庭園的と言うよりはむしろ土木的に見せたいというピートの強い希望により、今では余り見られなくなった間知石の谷積み風パターンとすることとなり、ヘッズによ

てコンピューターを使用した螺旋状のパターンが描きおこされ、また全ての石の寸法まで計算によってだされた。(図-3、4、5参照)

芝山は当初は(I B M幕張での失敗に懲りもせず)苔を使用したいと言うのがPWWJ内部の大多数の意見であったが(今でも幾つかの出版物にはMOSS MOUNTAIN=苔山というのが使われているのは、お恥ずかしい話ではあるが……)45度を越す急勾配を持つ円錐台に、とても苔など張って生育を期待出来るものではなく、ピートのみならず事務所を説得するのに、ひと仕事であった。最終的にはヘッズよりの提案によるテク・ソイル工法で円錐台の土の形を完全に作った上を、PWWJ提案による姫高麗芝の特注品(ブロックの様に裏土を厚く付けたもの)で、ブロック状に積み上げていく事とし、これによって一切のエロージョンが起きること無く、現在に至っている。また、同山頂には水の飛距離の違う三種類のイリゲーション・ヘッドを用意し、スロープの上部と下部で水分条件が同じとなるように散水する工夫が、PWWJによってなされた。(図-6、7参照)

飛び石ライン用の石材は、あちこちの材料を検討して回った結果、結局地元に近い丹波生野産の石を使うこととした。飛び石は、PWWJとヘッズによって全数選択され、石の顔や向きが決められた上で、全ての石に番号がふられた。そのうえで、飛び石の並ぶ順序も設計サイドでほとんど決定された。完全な直線に自然の石を並べていただくというのがまた意外に難しく、仕事をしていただいた職人さんも、ついつい日本庭園風に左右に振れて石を据えてしまい、何度もやり直していただくこととなり、ご迷惑をおかけした。(図-8参照)

丸太によるライン用の素材は、外材輸入業者の原木材料置き場まで出向いて、イメージに合った若干こぶの有るような丸太を選び出し、その場で太鼓に曳いてもらっての見えかたの確認を行った。四国の庵治にある、イサム屋の黒光りしたような丸太の大梁が、ピートのイメージということで、

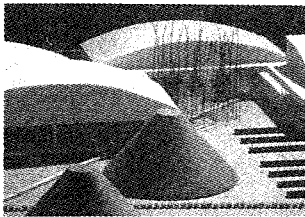


図-1 設計中のモデルの写真。コートヤードの中の「象徴的な山と質の違う三本の線」

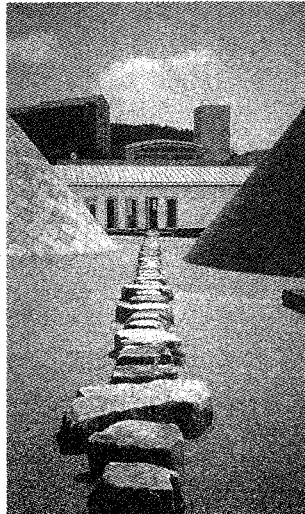


図-2 飛び石のラインと左右の象徴

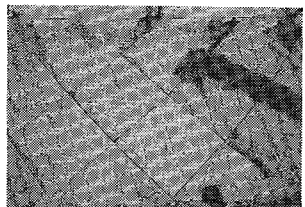


図-3 「石山」石積みパターン

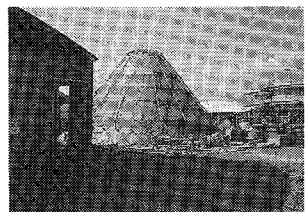


図-4 「石山」の工事中写真

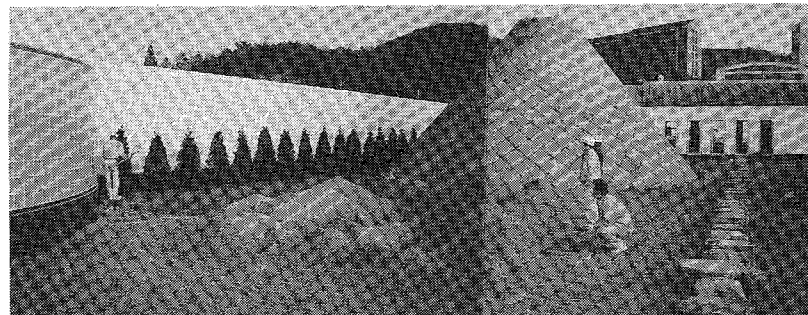


図-5 石積み完成。コートヤードにスケール感を与えるコニファー植栽後の剪定中。

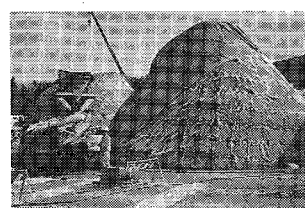


図-6 芝山の工事中。テク・ソイル工法完了後の養生。

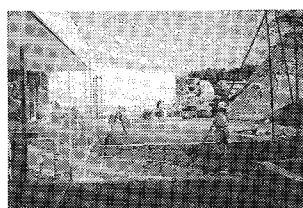


図-7 芝山に芝貼り作業中

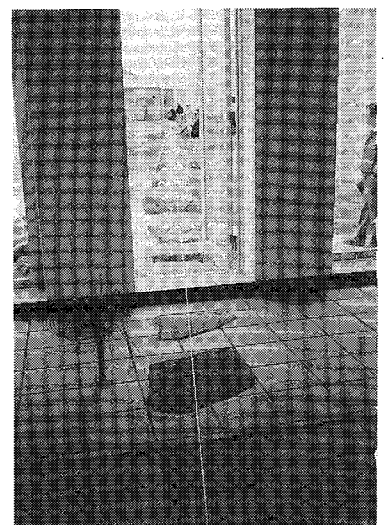


図-8 飛び石ラインの修正中

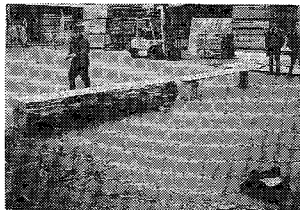


図-9 原木製材業者ヤードでのモックアップ風景

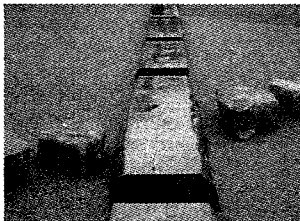


図-10 丸太ラインと飛び石



図-11 黒御影のピア両サイドの肌の荒らし方の検討中

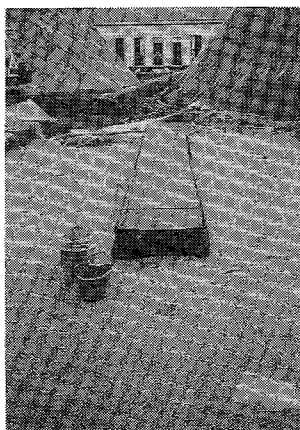


図-12 黒御影のピア、飛び石、芝山、石山の工事中風景

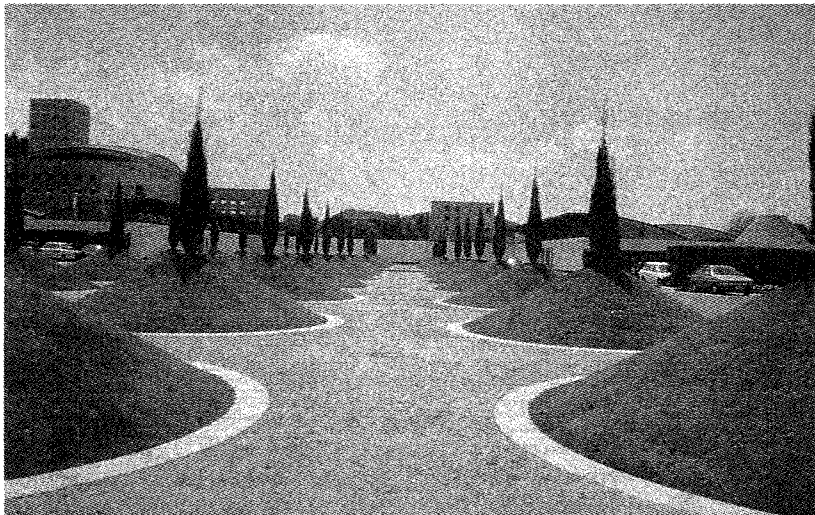


図-17 完成写真

WESTERN RED CEDERの丸太の仕上げには防腐・防蟻処理をしたうえで表面をトーチで焼いていたが、その後みがいて仕上げていただいた。(図-9、10参照)

黒御影のスラブは、中国より五面のこびき、一面水磨きで送られてきた。実施図面では目地にモルタルを入れることとなっていたが、石のムクの力をうまく引き出す為に目地モルタルは中止、スラブ外周の四面も思い切って職人さんに割り込んで頂くこととした。また、山から出て来た時の茶色の錆びは出来るだけ大切に残した。結果として、力のある「太い線」としてうまく機能していると思う。(図-11、12、13参照)

駐車場の中央に位置するプロムナード部分に、三列で並ぶ円錐台の芝生で覆われた土盛りの形を設計当初の形状で維持する為に、円錐台の上部平場部分の外周部スロープの始まる部分には、鉄製のリングが地面すれすれに埋め込まれている。鉄製のリングには、三本の足が溶接されていて、足下部は原地盤に敷設されたコンクリート基礎に固定されている。この装置によって、円錐台が時の経過と共に曖昧な形に変質していくのを完全に防いでいる。(図-14、15、16、17参照) また、リングには、円錐台平場に植栽された樹木の支柱をかねたポールが溶接されており、ポールの先端に

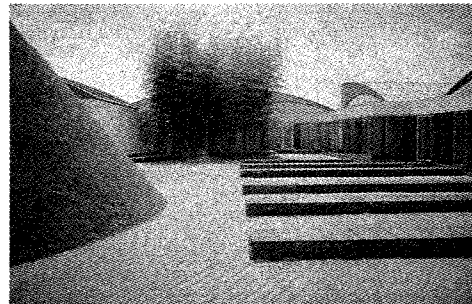


図-13 完成写真

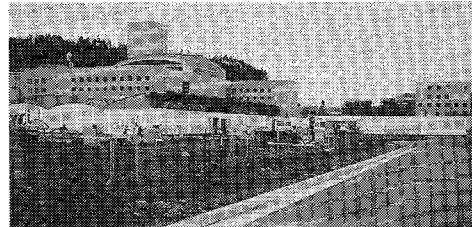


図-14 駐車場、プロムナード部分。円錐台の土盛りの為の鉄製リングが見える。

は発光ダイオードの赤い小さな燈具がセットされている。このポール自身も、木の成長につれて伸長出来るように、テレスコープ構造としている。

ついでながら申し添えると、この円錐台の上に植えられている木は、設計当初はスエシカ・ジュニファーであったが、美しい樹形のものと同型で揃わなかったために、たまたま材料検査に赴いた苗圃で発見したスカイロケット・ジュニファーに変更したものである。

また、上記宿泊棟コートヤードの中にグリッド状に植栽されているモウソウチク49本は、千数百本におよぶモウソウチクを検査した中から選択されたものである。通直で、下枝のある、余り背の高くない、一年生の若竹で、根のしっかりしたもののみを選定している。グリッドのパターンで植栽された外周には、根の不用意な拡張防止のためルート・バリアーが地中深くまで用意されている。またパターンの中で、竹に生えてきて欲しくない部分には逆に、化粧砂利敷のすぐ下部分にコンクリートスラブを敷設し、デザインパターンのコントロールを計っている。(図-18参照)

このように、目には触れない部分、おもてに表れない部分に多くの装置を仕込むことによって、美しい「かたち」がサポートされ、出来上がっている事を、御理解頂ければと思う。

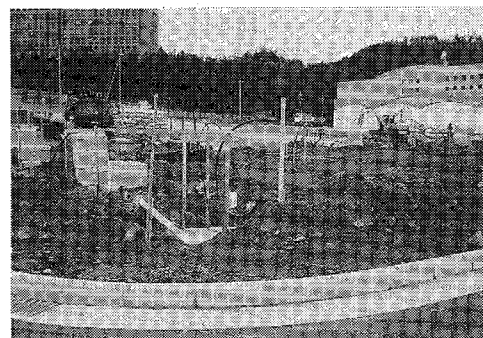


図-15 鉄製リングの施工中

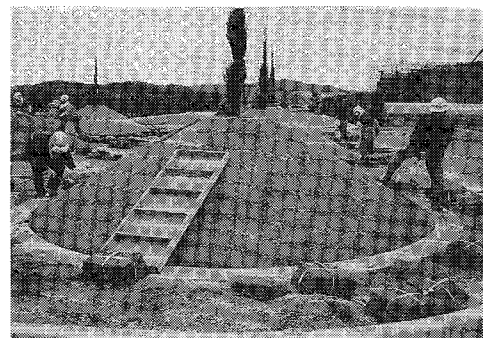


図-16 プロムナードの円錐台の芝貼り中



図-18 竹林の中の生長コントロール用のコンクリート・スラブ

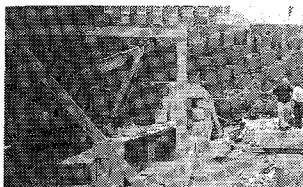


図-21 現場検討中

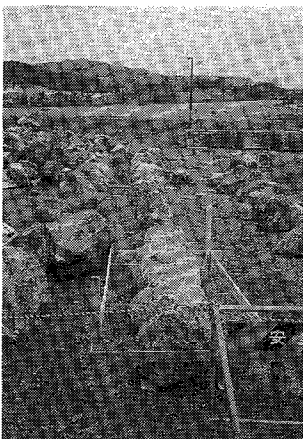


図-22 修景池の中の「飛び石」。モックアップ中

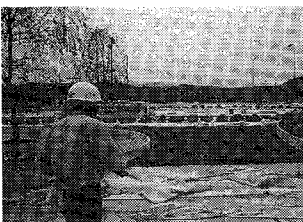


図-23 修景池の柳島と飛び石のライン

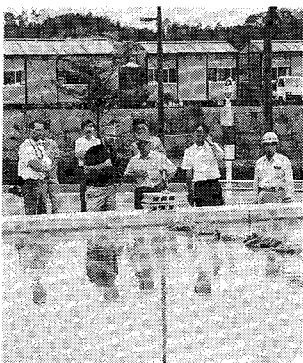


図-24 修景池のわたり飛び石の現場検討中

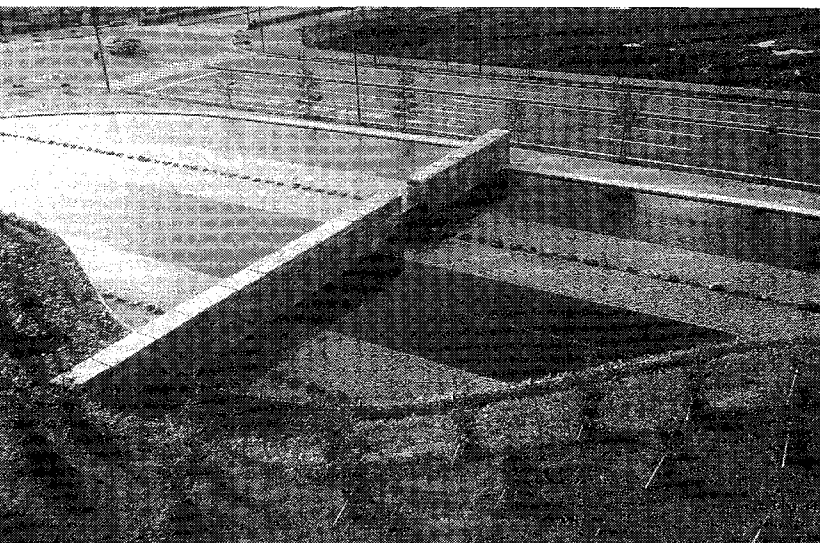


図-19 修景池を含んだ播磨タウンパーク・一期工事

播磨科学公園都市・タウンパーク・一期工事プロジェクトで考えた事

このプロジェクトは、前記、先端技術センターの裏正面、新都市の中央交差点の四分の一の部分である。兵庫県企業庁による発注で、PWWJにより基本計画および基本設計、ヘッズによる実施設計、再びそれをPWWJがレビューするという、コラボレーションの方法がとられた。契約関係的には、磯崎アトリエは直接の関係は無く、ヘッズによる企業庁よりの受託をPWWJが協力すると言う形となり、ヘッズ事務所の太塚守康氏および担当の皆様にはひとかたならぬお世話になった。契約的にも、随分とアメリカ的に厚かましい御無理を申し上げたのを、太塚氏の人間の器の大きさに受け入れていただき、PWWJとしてもヘッズのような度量の深い日本の事務所とお付き合い出来て、ほんとうに感謝している。

磯崎アトリエおよび設計組織A・D・Hからは、デザイン段階から工事にいたるまで一貫して、新都市の為の「アーバンデザインチーム」の一員としてのスタンスで、デザインのアドバイスをいただいた。

実務レベルでは、PWWJ×ヘッズのコラボレーション二作目ともなると、お互いの意思疎通も早くなり、PWWJがどの程度まで物づくりにこだわるかも良く理解していただけているために、設計、監理期間中も含めて特に大きな問題も発生せず、比較的スムーズに流れたプロジェクトであったと思っている。

工事の管理契約は、上記と同じくヘッズ受託で施工管理を行い、PWWJがデザイン監理で協力するというかたちを、企業庁の土木発注でとらせ

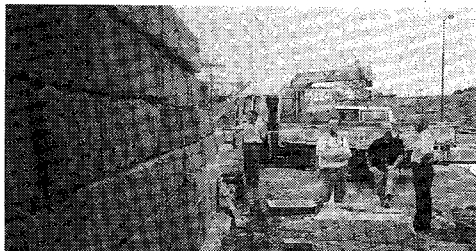


図-20 修景池中の石ウォールの検討中。右から2人目がピーター・ウォーカー。

ていただいた。PWWJのデザイン監理のやりかたに、企業庁の現場土木担当者は、最初は面食らっておられたようであるが、質の高いものを作るという共通の目標の為に、非常に積極的に協力していただき、これほど仕事を楽しめたプロジェクトもひさかたぶりであった。公共の仕事の場合には、いいものが出来るかどうかは、少なく見積もっても三分の一位は担当役人の理解度・協力度・調整能力によるものであることは間違いない。

(図-19、20、21、22、23、24)

道路敷部分に接するこのタウンパークで、歩道部分と公園とがその境界部分でどう折り合っているのかは、ランドスケープとしての質を高める為にも非常に大切なポイントとなる。歩道を歩いても、あたかも公園の中を歩いているように感じること、また公園的なイメージが歩道部分まで、いかににじみ出せるのかと言うことが、このランドスケープのデザインの核心であるようにも思える。ここで申し上げようとしているのは、何も公園の横の歩道部分に、高価な公園風の舗装材料を使えと言っているのではなく、むしろその逆で、道路に接する公園内の素材などハンプルな物である程よく、それよりももっと大切なのは、道路敷と公園のあいだの行政管轄の違いによる境界線をいかにランドスケープのデザインによって見えなくする事が出来るのか、そうすることによって、どこまでランドスケープとしての空間領域を広げていけるのか、ということである。

このタウンパーク一期部分では、特に歩道と公園の接する部分に注意を払い、出隅・入り隅を公園内に作ったうえで、その部分まで歩道で使われているコンクリート平板舗装を引き入れることとした。出隅・入り隅により出来上がったスペースに、バス・シェルターを、あたかも公園内施設のような扱いで配置している。こういったファジーな敷地境界領域が可能となったのも、ひとえに役所側担当者の御理解、その上での調整・尽力によるものであることは申し上げるまでもない。

東京海上・東日本研修センタープロジェクトで考えた事

鹿島デザインの押野見邦英氏との協働のプロジェクトで、PWWJでは基本計画・基本設計・実施設計・設計監理と一貫した流れのなかで関わらせて頂いた。施工は無論、鹿島建設によった。

どちらかといえば、ランドスケープの工事予算がふんだんにあるとは言えない、ローコストに抑える事を念頭に置いたプロジェクトであり、基本設計段階でのVALUE ENGINEERING (VEと略しコスト切り下げの為の設計変更)の回数は、片手ではきかないのではないかと記憶する。施工業者及びその下請け業者が、先行してがっちり決まっている構造の中でのコストを下げるためのネゴシエーションであった為に、PWWJの立場としては非常に厳しいものがあつた。このように、基本設計のVEの段階から工事担当の現場所長・甲斐政

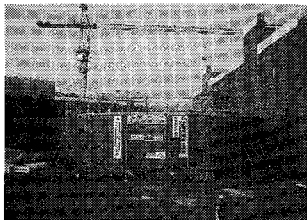


図-A 躯体建設中

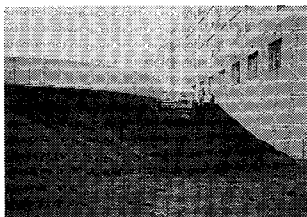


図-B スロープ造成中

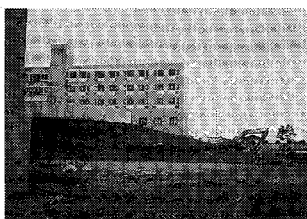


図-C スロープ造成中

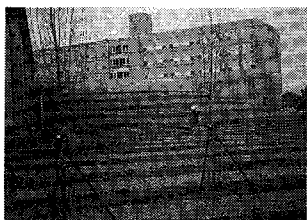


図-D スロープ及び平場のストライプ模様



図-F ストライプにシープ・フェスキューのソッド・ロール張り付け中

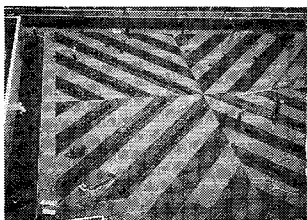


図-G ストライプ作成中

人氏とやり合うこととなり、額に青筋を浮かせ、口角から泡を飛ばしての激論となることもしばしばあった。

考えても見れば、もともとPWWJのコンサルタントとしての立場も、変なものであったのであろう。PWWJが、単にデザイン・コンサルタントとして、デザインアイデアだけを鹿島に提供するだけに留まっていれば、PWWJと鹿島デザインと言うデザイナー同志の関係で完結したのであろうが、PWWJが下手に(?)ものづくりにまで色気を出したために、あらゆる意味での「プロ」の「つくりびと」集団である鹿島建設を相手にまわして、今度はデザイン・テクニカル(技術)・コンサルタントを演じる必要が出てきたのだ。無論、そこまでやる以上はPWWJとしても、「最も適切な金額」で行える「ベストの事」を工事担当会社にやって頂こうと努力するのが、当然である。しかしここで、鹿島からPWWJのコンサルティング・フィーを払っていただきながら、逆に鹿島にとって、むしろ収益が減るかもしれない様な戦いを仕掛けざるを得ないと言う自己矛盾に気づいた私の心境は、非常に複雑なものがあったのは御理解頂けると思う。

この際ははっきりと申し上げておきたいのは、PWWJを呼んで下さった押野見氏は一貫して、あらゆる局面で、デザインにとって何が一番大切なのかと言うことを唯一の判断の基準として、PWWJをモラル・サポートして下さったという事である。御自分でもデザイナーとしての立場・考え・思想を、鹿島という大企業のなかで貫き通しながら、また他のデザイナーの立場も理解した上で、フェアに判断しサポートするというのは、並み大抵のことでは出来るものではない。特に、ゼネコンにとって逆風の吹くこの御時世では、なおのことであろう。そう言った意味から、デザイナーとして、またコーディネーターとして押野見氏は

素晴らしい技量を持った方だと思ひ、もう少し視野を広げて見れば、このような人を飼っている(失礼!)鹿島という会社はもっと凄いと思う。日本のゼネコンの総合力や底力を、まざまざと見た思いがしたものである。

また、現場所長の甲斐氏にしても、物づくりへの素晴らしい情熱を持った本物の「つくりびと」で、素晴らしい「鹿島マン」を見た思いがした。戦う相手としては、相当に手ごわかったが、終始一貫してフェアなゲームをしていただき、最終的にはほんとうに筆舌に尽くせぬお世話になった事を、ここに記しておきたい。(図-A~J)

さて、ロウコスト、ロウメンテナンスという施主よりの要望の中で、苦肉の策で思い付いたのが、アメリカの東海岸で活躍するランドスケープ・アーキテクトVAN SWEDEN氏が5年程前から大量に公共ランドスケープの中で使い出した、オーナメンタル・グラスである。もっとも、ワシントン・DCのキャピトルまわりのオープンスペースにオーナメンタル・グラスを多用したVAN SWEDEN氏によるランドスケープ・デザインが完成されるずっと以前から、オーナメンタル・グラスは、個人庭園レベルではかなり使用されていた。郊外に広がるDCメトロポリタンエリアの、いわゆるサブーブのハウジング・デベロップメントの住人となる、DC以外の米国各地から集まって来た、どちらかというといんターナショナルな感覚を身に付け、毎日ダークスーツに身を包み、フォーマル都市DCに通う中流達にとって、自分達のアイデンティティーの主張の為に、カジュアルなオーナメンタル・グラスが彼等の庭に必要であったのかも知れない。

いずれにせよ、オーナメンタル・グラス専門に研究・育成している大規模なホールセールのナーサリーもメトロポリタン・エリアだけでも2軒あり、需要と供給の関係の中で、かなり安価にポッ

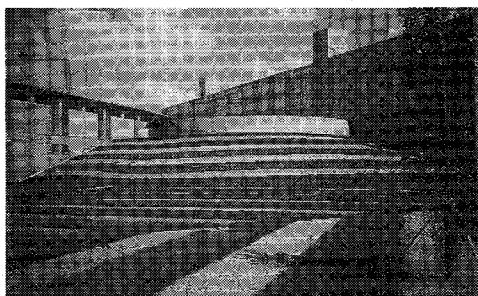


図-E 完成写真



図-H 完成写真



図-I 完成写真



図-J 完成写真

ト栽培ものが手に入る。それもそのはず、オーナメンタル・グラスという仰々しい名前が付いているものの、元はと言えば、ススキ・パンパスグラス・カヤツリグサ・キツネノシっぽなどの雑草を若干品種改良してわい性にした、葉にストライプ模様が出るようにしたり、花穂を大きく美しくしたりしているに過ぎないからだ。

さて、日本国内の状況を調べてみると、オーナメンタル・グラスらしきものを作っている材料生産業者も数社あったが、いずれも生産量は実験程度で、単価的にも、とても使える金額ではなかった。個人庭園という場の絶対総量がますます小さくなっている日本では、アメリカのサブurbに広がる個人庭園での多様かつ大規模な植物需要に対する供給システムのようなものは存在することが出来ず（また、多くのそれらの材料は公共ランドスケープに互換性のあるものでもあるのだが）、公共プロジェクト主導の、一般的な、今までに実績の有る植物材料のみが繰り返、都市内であろうが郊外であろうが高速道路のそばであろうがお構い無しの金太郎飴現象となったのであろうか？

そこで、アメリカの大手グラス・シード会社にあたりを付け、そこから大量に芝草の種を輸入している日本の会社を教えてもらう方法を取った。芝草の中から、日本の気候で育ち、伸び切り状態であまり大きくならず、しかも美しい物を、オーナメンタル・グラス風に使用しようと言う訳である。その結果、東京の東洋グリーンと言う会社の名前が分かり、早速コンタクトを取った。東洋グリーンという会社は、種子だけでは無く、各種肥料・薬剤・その他芝草のメインテナンス用の動力機械一式等も含めて輸入しており、その他にもIPM (INTEGRATED PEST MANAGEMENT) 方式による害虫駆除の考え方の指導、芝草全般に関するコンサルティングと広範囲に渡った業務を行っていた。また、アメリカの芝草に関してのエキスパートのみが持つ、CERTIFIED GOLF COURSE ATTENDANTの資格を収得された方が何人かおおいになったのも、心強かった。

東洋グリーンによるコンサルティングのもとで、芝草の種類を検討した結果、PWWJのデザイン・ボキャブラリーに最も近いものが「シープ・フェスキュー」であった。当初は、シープ・フェスキューの種を使って自前のポット苗を作成しようと、園芸用のトマトやナスビ、キュウリなどの苗をオートメーション方式で作っている、成田空港の近くのティ・エム・ボール研究所などを訪問してその可能性を検討したが、最終的にはコスト面で有利な芝生マットを栽培生産している業者に種子を渡し、契約栽培していただくこととなった。芝生の中には無論、マットとして切り出した時にマットが破れたりつぶれないようにするためのネットが仕込まれてはいたが、それでもある程度は根による絡みが必要なため、これにふさわしい密度で種子が蒔かれたようである。その過密も一つの原因と思われるが、後に芝草の蒸れによる傷み

となり、その対応に四苦八苦することとなる。もっとも、どちらかと言えば痩せ地に良く育つ芝草にとって、宇都宮大学の圃場があったと聞く当該地では、肥料が利き過ぎていて良く育ちすぎたという、もう一つの原因も見逃せない。

いずれにせよ、芝草を刈らずに見せようとするためには、一般の芝生地造成の場合に比べて、比較にならないほどの苦労があったのだ。その過程で、東洋グリーンには大変お世話になった。コンサルタントとして、また材料の卸業者として、両刃の剣で時には混乱した時もあったようであるが、東洋グリーンに出会わなければ、このプロジェクトの面白さは半減したのではないかとも思っている。

豊田市美術館プロジェクトで考えた事

谷口建築設計研究所とのコラボレーションによるこのプロジェクトは、昨年の11月に美術館のオープンを見るまで、設計段階からいれると4年の歳月がかかっている。豊田市より依頼を受けた谷口事務所のサブ・コンサルタントとして、基本設計・実施設計・設計監理までPWWJで係らせて頂くという一貫した流れのなかで、作業は進められた。

デザイン作業に取り掛かる前に、ピートと二人で、まだ小学校の校舎や運動場・プール等が残っていた敷地を走り回り、原アイデアの抽出をしたのが、まるで昨日の事のように思える。その後、設計期間中にも、土壤に関してのエキスパートである大阪府立大学の教授・森本幸裕教授 (JUDIのメンバーである) や、植物に関して詳しいワシオ・アソシエーツの鷲尾金弥氏にも、現場まで来て頂いてコンサルティングを行なって頂いた。また、建築の建設用地の中に生えていた、エドヒガンザクラやカシの巨大な古木を移植、保存するための別途発注の工事のためのPWWJによる「ヒメリック理論」に基づいた仕様書を、実際の工事計画としていただく為に、スタジオ・アーバン・スペース・アートの高岡智之氏にご協力いただいた。

その他にも設計途上で、数多くのコンサルタントの方々に御協力、御助言頂いたが、この場をお借りして、厚くお礼を申し上げたい。

建設工事が始まり設計監理の段階に入り、PWWJの目となり耳となって、現地で日々必要となる業務を協力していただける事務所なり人なりを、探し出す必要がでてきた。私自身が、名古屋エリヤに全く不案内なため、どのような方法でローカル・ランドスケープ・アーキテクト探しにアプローチしたものかしばらく思案したあげく、名古屋エリヤで建築・ランドスケープ・アート専門の洋書の輸入・販売をしておられる本屋さんあたりをつけ、アメリカのランドスケープやコンテンポラリーアート等に関する本をよく買って勉強している人、あるいは事務所をリストアップして頂いた。そのリストアップされた人達に、プロジェクトの概要等を記した文書をファックスし、興味を

持っていただいた方々全てを、訪日の度にインタビューさせていただいた。その結果、選ばせていただいたのが、溝口一三氏である。

溝口氏にはランドスケープの工事期間中の約2年間の永きに渡って、PWWJの裏方に完全に徹して頂き、プロジェクトの質を高める為に、本当に良く御協力頂いた。施主である豊田市、建築の谷口事務所、工事を請け負ったゼネコン・その下についたサブコン・メーカー等の日本サイドと、アメリカのPWWJ事務所の間の、私に加えてのもう一つのベアリングポイントとして、ほぼベストに近い関係で機能したと思っている。

工事の期間中、PWWJと日本サイドのファックス通信のやりとり一つに関しても、熾烈をきわめ、私の手元には厚さ10センチ弱のファイルにとじた全28巻分の交信文書が残っており、いかに濃厚なプロジェクトであったかがお分かり頂けるものと思う。またそれに加えて、PWWJによる徹底的な施工図の検討、ほとんど全てのランドスケープ・エレメントの幾度にもわたる現場でのモックアップ検査、最終施工確認の為に、芝生、カキツバタ、シダ等の専門家へのレビュー依頼などのプロセスに気長に、忍耐強く付き合ってくれた、ゼネコン、サブコン、メーカー等の工事関係者の皆様には本当に世話になった。

それにもまして、何よりも感謝しなければならないのは、谷口事務所がPWWJのプロジェクトの進めかた及びフィールド・エスタティック・ジャッジメントに関して、ほぼ全面的に信頼して頂き、いくつかのランドスケープ・デザイン・エレメントに関して以外は、全てを任せて頂けた事であらう。

いくつかの重要なランドスケープ・デザイン・エレメントに対する考え方の相違から、谷口事務所とPWWJの間で起こった議論に関しても、建築とランドスケープの間のコラボレーションという意味合からすれば、もうすこし違う折り合いがたがっても良かったのではないかと言うのが、私の個人的な意見である。ランドスケープの天才P(?)も歳を取ると、根気が粘りが無くなると言うことか?

いずれにせよ、いくぶんかの不満があちこちに残るものの、何とか及第点を頂けるプロジェクトとして原アイデアの翻訳が完成したと思っている。

この豊田市美術館プロジェクトに関しては、その「物づくり」の過程で、あまりにも多くのデザイニング的、技術的検討がおこなわれたし、そのひとつひとつの作業の積み重ねそのものが非常に重要であるとの認識から、また別の適当な機会を捉えて「物づくりのプロセス」として詳しく述べさせて頂きたく思っている。

おわりに

以上、簡単ではあるが、PWWJのプロジェクトの主だったものに関する、デザイン論をすっ飛ばしての、ほんのごく一部の裏話の公開となった

次第である。

PWWJのデザイン論に興味を持たれる方は、プロセス・アーキテクチャー誌の85号と118号、SD誌の9407号を、お読み頂ければと思う。

アメリカのランドスケープ・アーキテクト事務所働く日本人が、日本での幾つかのプロジェクトに係わらせて頂き、そのなかで経験し、行動し、考えた事を、勝手きままに、思い付くままに述べさせて頂いた。

そもそも、日本の造園は、ずっと昔から徒弟制度で、真似の世界であった。親方の言うこと・やることをじっと横で眺めていて、その通り真似をするわけであり、また自然という大先生を観察して、風景を模写するわけであった。その物真似や模写の伝統は、別に日本に限った現象ではなく、西欧でも特にファインアートや音楽の世界では、模写・コピーは技術取得の為の手段としておおいに重要視された。

近頃、ピートのデザインの真似を、日本のランドスケープ・デザイナーがして困ると、苦々しい顔をして私に告げる人が多くなった。私はそれには、コメント出来る立場に無いし、評論家でもないの、必ず無視することになっている。が、正直なところ、私は真似をする事がそんなに悪いとは思っていないし、本当に真似が出来ればむしろ、大したものだ。また、真似が出来たと思っている人は、本当に幸せであると思う。何だか、皮肉っぽい言い方になってしまっただけ心苦しいが、私が思うには、出来上がってきた形が、結果的に真似したように見えようが、見えまいが、極端にいえばどうでも良いのではないかな?

問題は、デザインのプロセス、「物づくり」のプロセスの両方が、荷車の両輪の様にうまく機能しており、ランドスケープという積荷を積んで、貴方自身がこれから先、ずっと引っ張って行けるのか、と言うことだ。両輪さえしっかりしていれば、まだまだ前進出来るので、心配はない。たまたま出来上がってきた形など、前進途中の排泄物のようなものだ。とは言うものの、排泄物は、自分自身で責任持って始末して頂く必要がある。また、御自分の健康の為に、排泄物は、御自分でも、つくづくと眺めてやって頂きたい。

なんだか最後に、汚い例え話となって恐縮だが、つまるところ、私の見た限りでは日本には非常に優秀なランドスケープ・デザイナーはたくさんおいでになるし、また表面的に出来上がった形上、真似の域をほとんど越えておられるデザイナーも出始めていると思う。デザイン論もしっかりと交わされている様なので、デザインに関しては問題ないと思う。

問題は、もうひとつの「輪」の方にあるような気がしてならない。

荷車の、左右の車輪の大きさのバランスが余りにも違う為に、戦後の方、同じ所をぐるぐると大きな円を描いて、まわっている様なイメージが見えて仕方がないのだ。 おわり

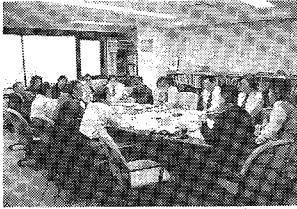
委員会活動報告

事業委員会

南條 道昌

MICHIMASA NANJO

事業委員会担当代表幹事
(株)都市計画設計研究所



都市環境デザインガイドブックの編集について

事業委員会は、総会でお知らせしたように全国の都市を対象に、都市環境デザインに係わる事例を集めた出版物を刊行する準備を進めている。事業委員会で取り上げる理由は、身銭を切った自己広報が目的なのではなく、あくまでも一般の読者や学生たちに買ってもらえるようにして、事業としての採算性を狙い、その上で私たちの目的である都市の環境の大切さに気付いて貰うという主旨を全うしようとしている点にある。

このため、全国ブロック幹事の方々にご苦勞を願ひ、全国ブロック編集会議を開催している。並行してより少数の方に集まっていただく編集会議を組織しその活動も始めた。出版社は「建築ガイドブック」を手がけて5万部を売り自信を付けているTOTO出版にお願いすることにあり、近々出版社の体制の確定とともに打

合せが始まる予定になっている。

最大の問題は、事例の選択である。この選定に関して各ブロックでフォーマットに従い、原案を作成していただいた。選定の基準を含めて色々な問題を持っている。デザイナーが関与している場所、街の環境として心地がよいと感じられる場所、街の個性が読みとれるところ、色々な選択があり得る。今までのところブロックごとに選定の基準にも微妙な差がでて面白い。しかし最後は書店に並んだときに、買い手が買いたくなるかどうかだ。

このような観点を含めて、準備にはまだ相当時間がかかりそうなので、会員の方々に大いに議論をして頂きたいと考えている。所属のブロックで、どこが選ばれているのか。特に会員も事例も多い関東ブロックは、更なる議論が待たれている。みなさんのご協力をお願いしたい。

都市環境デザイン会議 95年度年間スケジュール

	2月	3月	4月	5月	6月	7月
本部	2/5代表幹事選挙告示 2/23立候補締切	投票用紙送付	4/2投票締切			総会
広報出版委員会		JUDI NEWS 29号 年鑑出版		JUDI NEWS 30号		
研究研修委員会	第3回環境デザインセミナー		学生向けセミナー		自治体講習会	
事業委員会	2/2セミナー※3 都市環境デザインガイドブック編集会議(全国)		都市環境デザインガイドブック編集会議(全国)		都市環境デザインガイドブック編集会議(全国)	モニターメッセ
国際委員会		3/12国際セミナー T.Wang「視覚プレゼンテーションの技法」		5/11国際セミナー 在日外国人専門家によるまちづくり討論会		
北海道ブロック			例会			例会
東北ブロック				交流視察会「東北地方の都市デザインを考える」		
北陸ブロック				研究発表会		
関東ブロック		ブロックレター No.13	例会「デザインと法的根拠」/ブロックレターNo.14	交流視察会「東北地方の都市デザインを考える」		ブロックレター No.15
中部ブロック						
関西ブロック	セミナー	セミナー	セミナー	セミナー		
中国ブロック				例会・研究会		
四国ブロック						
九州ブロック				例会・シンポジウム(大分県内)		

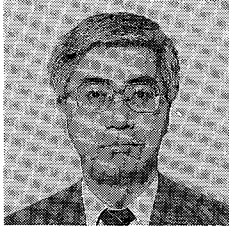
※3 景観材料推進協議会デザイン振興部会 デザインセミナー企画及び講師派遣

選挙管理委員会 役員選挙結果報告

菅 孝能

TAKAYOSHI SUGE

選挙管理委員会委員長
㈱山手総合計画研究所



1996年2月5日に告示致しました標記選挙の候補者届出の受理は、1996年2月23日午後6時に締め切りました。その結果、役員選出規定、同細則に基づく有効な届出は、代表幹事においては推薦候補者10名、監査役については推薦候補者2名でした。

その結果、役員選出規定第9条の2に基づき、全員が当選人として選出されました。

なお、当選人は1996年7月に予定されている本会第6期定例総会における承認によって、正式に選任されることとなります。

■代表幹事当選人氏名（届出順）／所属及び所信

高橋志保彦 ／神奈川大学	JUDI発足以来5年、着実に成果をあげて来ていると思います。これからもこの会が発展するために、この会の活動の柱である各ブロックの動きが益々盛んになり、各ブロックからの発信が多くなることを期待します。そのためにはどうすれば良いかを考えたいし、各ブロック及び各ジャンルを越えて交流し、コラボレートすることが、この会の存在のユニークさであり本質的な意義でもありますので、その方法も探りたいと思います。そしてJUDIの魅力と影響力を増して行きたいと考えます。そのために若い人が中心となったイベントを組み、また各自自治体との意見交換もしてみてもどうかと考えています。そのような思いから立候補します。
井口 勝文 ／㈱竹中工務店開発計画本部	自主自立、会員相互に親しむJUDIの会の運営に、出来る限り、精一杯の協力をさせていただきます。
谷 明彦 ／㈱創建	JUDIの知名度を高め、技術レベルを向上させたい。また、国際委員、中部ブロックの代表としての活動も充実させていきたい。
伊藤 洋 ／㈱都市環境計画研究所	20世紀から21世紀へ、新しい社会への胎動が始まっています。都市における空間づくりの作法も変えて行くことになると思っています。都市環境デザイン会議で、皆さんと一緒にそれに立ち会い、参加していきたいと考えています。その立場で、私にできることはお手伝いするよう努めたいと思います。
西澤 健 ／㈱G K設計	都市環境デザイン会議も軌道に乗りつつあると同時に新たな問題も生じはじめています。今回は特に本部と地域との関係が複雑になっている時期に代表幹事の選挙があります。できれば、活力のある若い世代の方にお願ひしたいと思いますが、やはり経験者も1、2名は必要という声もあります。そこで私は若い代表幹事のバックアップと相談相手という役割を意識して、代表幹事に立候補することに致しました。
倉田 直道 ／㈱アーバン・ハウス都市建築研究所	これからの都市環境デザイン会議の活動は、これまでの初動期の成果ならびに課題等を踏まえ、より社会とのつながりを意識した外に向けての活動を強化していく時期として位置づけることができる。そこで、会員相互の交流・親睦というこれまでの基本的活動を超えて、多様な分野の専門家の集まりである当会議の特色を生かし、都市環境デザインへの理解を深める対社会的な情報発信、情報交流の活動を推進していきたい。
成瀬 恵宏 ／㈱都市設計工房	この2年間、代表幹事として全国ブロック幹事会の連絡調整役をしてきましたが、もう少し活動の場を拡げていきたいと思っています。
吉田 慎悟 ／カラープランニングセンター	私は環境色彩計画を仕事としているため、都市環境デザインにかかわる多くのデザイン分野と共同してきました。色彩は環境を構成するすべての要素と関係していますから、仕事の中で関係性を考える機会が多くありました。このような経験を通じて都市環境デザインにおいては、専門分化したデザイン分野が、お互いにもっと理解を深める必要があると感じています。都市環境形成を進めるデザイン分野間の相互理解を深め、共同できる場を強化して行きたいと考えています。
宮前 保子 ／㈱スペースビジョン研究所	力量、技量とも微力ながら、精一杯、活動させていただきます。
岸井 隆幸 ／日本大学理工学部土木工学科	今期、代表幹事をつとめさせていただきましたが、これといったお役にたっておりませんので、来期は、少し心を入れかえて働かせて頂こうと思います。

■監査役当選人氏名（届出順）／所属及び所信

加藤 源 ／㈱日本都市総合研究所	代表幹事としての4年間の経験を活かし、本会のより一層の発展に努力していきたいと考えています。殊に監査役の立場からは、予算の効果的執行、これによる活動の活発化等に意を注ぎたいと思っております。
南條 道昌 ／㈱都市計画設計研究所	土木・造園・建築・その他の諸々の環境に係る設計が、個別バラバラに行われている現状に対して、総合的な場づくりをする体制が無いことを確認し、その必要性について実践的に社会的アピールをしてゆくことが必要と考えます。この目的に沿って当会議の活動が軌道をそれないよう盡力したいと思います。

■国際委員会

窪田 陽一

KUBOTA YOICHI

国際委員会担当代表幹事

埼玉大学工学部



■ブロック例会レポート

■北海道ブロック

矢島 建

YAJIMA KEN

北海道ブロック幹事

(株)プランニングワーク
シヨップ



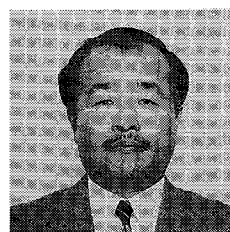
■関東ブロック

横川 昇二

SHOJI YOKOKAWA

関東ブロック幹事

(株)横川環境デザイン事務所



平成7年12月20日(水)に本年度第1回委員会を、平成8年2月9日(金)に第2回委員会を開催し、平成7年度活動計画の具体化を検討しました。まず、来日した外国人専門家による講演会を、第2回JUDI国際セミナーとして本年3月12日(火)に開催することとしました。本年2月初旬にJUDI Newsと一緒に送付してある案内リーフレットの通り、アメリカ人のWang氏を講師として、都市環境デザインのコンセプトを視覚的に表現するドローイングの技法についての講習会の形で行われるものです。また、在日の外国籍都市環境デザインの専門家をパネリストに招いて昨年度第1回目を開催し

北海道ブロックでは、今年に入って毎月例会を開催している。

都市環境デザインガイドブックの編集の件が毎回の議題となっている。併せて、ミニ・シンポも行っており、2月15日の例会では「北海道の土木施設レビュー」をテーマにディスカッションを行った。

会員の武山さんより話題提供をしてもらい、道路・街路、橋梁、トンネルなど土木構造物と舗装、照明灯、植栽等の付帯施設のデザインがもつ問題点について意見交換をおこなった。

関東ブロック活動の動き

1月27日に40名が参加して「立川の新都心づくりーファースト立川」の見学会を行ないました。住都公団の板橋氏からは、計画の概要や経過についての説明、アート・フロント・ギャラリーの北川氏からは、パブリックアートの概要や計画経過のお話があり、参加者との間で質疑や意見交換が行われました。

また、北川氏のご案内と詳しい説明を受けながら、参加者全員で見学して回りました。詳しくは、ブロックレターに掲載してあります。

今年度の活動としては、4月例会と5月例会を予定しております。4月例会は「デザイン監理」の続編として、朝倉特許事務所の朝倉悟氏と弁護士の大森文彦氏をお招きし、「都市環境デザインにおける知的所有権」について議論を行いたいと考えております。

都市環境デザインや土木の分野では、設計やデザインに関する知的所有権については、今後権利と義務・責任の両面から徹底した議論が必要だと思いますので、会員の方々の参加とご意見を期待しております。

5月例会は、東北ブロックとの共催で、見学会&シンポジウム『白河・棚倉の都市環境デザイン』ー歴史とルネッサンスのまちづくりーを予定しております。一部未定のものもありますが、次のような内容を計画しておりますので、奮って御参加下さるようお願い致します。

5月例会《見学会&シンポジウム》

1. 概要

たJUDI国際セミナーを、引き続き同じテーマで、新たなパネリストを招いて本年5月11日(土)午後1時に開催することとしました。このJUDI Newsと一緒に案内リーフレットが同封されていますのでご参照ください。概要は以下の通りです。

第3回JUDI国際セミナー

日時：平成8年5月11日(土)午後1時～5時

会場：INAX XSITE hall

(東京都港区六本木 アークヒルズ内)

参加費：会員・協力法人関係者＝¥1,000

非会員＝¥2,000

なお第3回委員会は4月3日(水)に開催されます。

お金をかけているのだから、なにを表現したいのかさっぱり伝わってこないもの……。地域の特性を表現するのに現物(擬似物)が出てきて、どこにも文化を感じずデザインがなされていないケースなど……。街並みや周辺環境に無関心なデザインや、統一のしすぎで単調な空間を創出してしまった……など等。

独りよがりのデザインといえば、未だにその嫌みがあるが建築がかつてそうであったように、土木系の都市環境デザインに混乱が起きている状況を、北海道ブロックでも気遣っている昨今である。

地元自治体関係者の案内で、白河市と棚倉のまちづくりや都市環境デザインの実情を見学します。そして、『白河・棚倉の都市環境デザイン』ー歴史とルネッサンスのまちづくりーをテーマに地元一般参加者も加わってシンポジウムを開催し、意見を交換したいと考えております。

また、今回は関東と東北の両ブロックの共催であることから、ブロック間の交流を深めると同時に、「東北地方の都市環境デザインを考える」機会として『ブロック間交流・懇談会』も予定しております。

2. 開催日：平成8年5月18日(土)、19日(日)

3. 予定

■見学会(18日、19日)：『白河市・棚倉町の街』

■シンポジウム(19日)

『白河・棚倉の都市環境デザイン』

○コーディネータ 小浪 博英

○パネラー・窪田 陽一(JUDI代表幹事、埼玉大学教授)

・久木田 禎一(JUDI会員、巴計事務所)

・古市 徹雄(古市建築都市建築設計事務所)

・地元自治体関係者(総)

■ブロック間交流・懇談会(18日)

『東北地方の都市環境デザイン』

4. 参加費

■第1日目(18日)のみ参加の場合 5,000円

■全行程(18日、19日)参加の場合 10,000円

5. 主催等

■共催：JUDI関東、東北ブロック

■後援：予定(福島県、白河市、棚倉町)

■協力：建築学会東北支部地域計画部会、他

口実行委員

関東ブロック；小浪博英、桜井 淳、
地福由紀、横川昇二

東北ブロック；山崎洋二、斉藤浩治
尚、《見学会&シンポジウム》の開催にあたって
は、実行委員会を構成し推進しておりますが、詳

しい内容や募集の案内は4月初旬にブロックレターでお知らせしますが、この企画についてご意見や御提案がありましたら、ご面倒でも下記までご連絡を下さるようお願い致します。
連絡先：FAX 03-3732-9947 副編集長 横川宛

■中部ブロック

玉木 伸秀
NOBUHIDE TAMAKI
中部ブロック幹事
(株)景観工学研究所



中部ブロックでは、活動の一環として、4月11日(木)、都市環境デザイン会議中部ブロック主催によるフォーラム「名古屋城本丸御殿の再建と都市デザイン」を開催。このフォーラムは、

- ・ 一般の人々に、名古屋城本丸御殿の再建活動を通して、魅力的な都市空間の創造・環境デザインの必要性を呼びかけ、一般の文化及びデザインへの意識の啓蒙を図ること。
- ・ 将来を見つめることは大事ですが、日本の伝統文化・技術といったところへも目を向け、国際都市・デザイン都市としての魅力づくりの大切さを広めること。

といったことを目的としています。

フォーラムにあたっては、〈建築、デザイン、華道、伝統、造形〉という各分野で活躍されているパネリストの方々とともに、地域風土に根ざし、歴史的に継承されてきた名古屋のまちのアイデンティティと都市環境デザインのこれからを考えたいと思います。広く一般にJUDIの存在と活動を知らせる良い機会であり、イベント前で注目度が高いこと、会場が東海テレビ放送のホールであ

るためパブリシティの効果が期待できることなどから、多くの会員及び知り合いの方々に参加を呼びかけて行なうものです。

なお、昨年、4月14日に催される、地域に根ざした市民手づくりの歴史まつり「春姫道中」に当フォーラムも共催しています。

[フォーラム及び例会スケジュール]

●日 時 '96年4/11(木)

フォーラム：15時～16時45分

引き続き会員は例会：16時45分～

●会 場 フォーラム：東海テレビ放送「テレビアホール」

●テーマ 「名古屋城本丸御殿の再建と都市デザイン」

●パネリスト 石田秀翠(石田流家元)／寺 光彦(豊田美術館館長)／長谷川真弘(御園座社長)／柳澤 忠(名古屋大学名誉教授)

●コーディネーター 夢童由里子(JUDI会員、造形作家)

●参加資格 一般(定員200名)

事務局より

1. 新会員の紹介

1996年1月1日～2月29日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

2月29日現在の会員数は、480名です。

氏 名	勤 務 先
浅野 房世	(株) E・I・E・コミュニケーション研究所
末成 祐二	大分県土木建築部施設整備課
三好 庸隆	(株) PPI 計画・設計研究所
松島 正矩	鳴門教育大学芸術系教育講座
高木 淳二	(株) 高木富士川計画事務所

2. 住所変更等(敬称略)

氏 名	変 更 内 容(新)
伊藤 敏和	(有) ホロンネットワーク 〒141 東京都品川区上大崎4-5-26 マツヨリ雅叙苑5-606 Tel.03-3493-6645
近田 玲子	(株) 近田玲子デザイン事務所 〒150 東京都渋谷区神宮前1-11-11-706 Tel&Faxは変更なし
面出 薫	(株) ライオン・フ・ランサーズ・アソシエーツ 〒150 東京都渋谷区神宮前5-28-10 Tel.03-5469-1022 Fax.03-5469-1023
森 俊偉	金沢工業大学建築学科 〒921 石川県石川郡野々市町扇が丘7-1 Tel.0762-94-6714 Fax.0762-94-6707

編集後記

1ヶ月余り発行が遅れてしまいました。すみません。「パブリックアート」の特集を計画していたのですが、いくつかの連絡ミスと手違いで予定がくぐりました。急速、阪神大震災の1年後の各種取り組みを紹介することにしました。神戸の街は超スピードで元に戻っているかのようですが、「くらし」の中味はまだまだこれからです。私達も復興に向けた長期持久戦の覚悟を新たにしています。長い目で見たご支援の程をよろしく。

(小林郁雄)

JUDIニュース編集委員会

土田 旭	櫻井 淳
沢木 俊岡	菅 孝能
中嶋 猛夫	作山 康
小林 郁雄	清水 泰博
宮前 保子	折田 知子
伊藤 光造	松村みち子